

「ので」を用いる日本語原文とその中国語対訳

注：分類欄に記載されている記号は次の意味を表す。
 A=「原因・理由を表すもの」、B=「接続機能を持つもの」、C=「無標」

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
「伝票が間違っていたのは存じておりました。でも、たいした違いではありませんでしたのでそのまま払いました」		“我知道传票拿错了。不过又不是什么大不了的差错，也就照付了。”		B-3	あした来る人 (情系明天)
	到底釈放されそうもなかったの、ありのままに言ってしまおうといった面持ちだった。		她察觉对方不会轻易放过自己，索性如实说了。	C	あした来る人 (情系明天)
	曾根があまりゆうゆうとしているので、心配になったのかも知れない。		或许见曾根过于坦然自若，不由替他担心起来。	C	あした来る人 (情系明天)
	曾根と山田とは高等学校時代、寮で一緒だった仲である。曾根は大学は農学部の水産科へ行き、山田は医学部に進んだので、それ以来親しいつきあいはなく、お互いにどんな生活をしているか知らない。		高中时代，曾根和山田住在同一宿舍。后来曾根进了农学院水产专业，山田考取了医学院。从那以后便中断了亲密的交往，各自的生活情形几乎互不了解。	C	あした来る人 (情系明天)
	ただ、たまたまこの友の住所を知ったので、曾根はこんどの上京に当って、東京滞在中の宿の世話を頼んだのである。		只因偶然得知这位朋友的住址，这次赴京前曾根才托其自己在东京逗留期间找个落脚之处的。	A-32	あした来る人 (情系明天)
	曾根は早く床に就いた。疲れていたの、よく眠った。		曾根早早上床歇息。因为累了，睡得很香。	A-1	あした来る人 (情系明天)
	十二分に眠ったので、長い旅の疲れはすっかり回復している。		由于睡得十分香甜，长途旅行后的疲劳已经不翼而飞。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	専攻が違うので、正当な理解は期待していなかったが、相手に最初からこの研究に熱意のないことが、曾根にも感じられた。		由于专业不同，曾根并未指望神谷给予应有的理解。但对方对此项研究压根儿就没有兴致这点，他还是感觉到了。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	だが、一般に北海道以外の土地では食べられないので、何となく人間生活と無関係なものと思うらしいのである。		只是，北海道以外的地方一般无人问津，因而人们便总以为它们对人的生活毫无作用。	A-35	あした来る人 (情系明天)
「この方がお見えになりましたので、ロビーの方へ御案内しておきます」		“有两位先生来，在大厅里等着呢。”		C	あした来る人 (情系明天)
「そうでございますか。丁度御一緒にお見えになりましたもので。失礼いたしました」		“是吗？因为正好一同出现……对不起。”		A-1	あした来る人 (情系明天)
	八千代は折角話してくれるので、何か口をきかなければ悪いと思って、そんな質問をした。「ひと組は夫婦者、ひと組はまあ若いアベックというところでしょうな」		八千代想，人家好心搭话，总该对一句才好。“一对夫妇，另一对怕是年轻恋人。”	C	あした来る人 (情系明天)
	夫の克平と電話で話したあとのさびしさが八千代の心を暗くしていたので、このもともと有難くない仕事で、彼女には急に心の重荷となって感じられて来た。		同文夫通电话后的寂寞感使得她心境黯然，对来医院这桩本来就不情愿的事情，陡然觉得成了沉重的心理负担。	C	あした来る人 (情系明天)
	八千代も、病室の真ん中に立っているのは変な具合だったので、洋菓子の箱を持ったまま、曾根の立っている同じ窓際に行った。		八千代也觉得不便直挺挺地站在病房中间，便仍然提着糕点盒，走到曾根站立的窗口。	B-2	あした来る人 (情系明天)
「じゃあ、退院していただくとして、お父さんが気を病むといけませんので、お食事でも御一緒にさせていただきますようか」		“那么，就算您可以出院……一同吃顿饭好吗？要不然我父亲会放心不下的。”		C	あした来る人 (情系明天)
	そう言ってくれたので、八千代はやはり行こうと思った。		见对方同意，八千代便定下主意去一趟。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	これは八千代からの依頼であるし、自動車でひっかけたという縁故もあるので、何とかしてやらねばならぬ。		这是八千代之托，二来又有被自己车撞过的因缘，要想点办法才是。	C	あした来る人 (情系明天)
「一度来しました。でも、お客さまの声がするので、またそとへ出て、そこらを歩いて来ました」		“来过一次。听里边有客人说话，就又跑出去，在附近转了圈。”		B-1	あした来る人 (情系明天)
	これまでまったく浪費ということを知らなかったの、今になって、だれにも知らずに、そういう支出ばかりの事業をやってみたくなったのである。		也正因为他以前从不知浪费为何物，所以现在才想在不让任何人知晓的情况下尝试一番陡然做出的事业。	A-46	あした来る人 (情系明天)
	「気に入るかどうかわからないよ。香港に行く人に頼んでおいたら、この間持ってきてくれた」梶は若い女が耳たぶにつける小さな物体に、奇異な感じこそ抱け、他になんの関心も持っていない。ただいつか杏子が翡翠の模造品をつけていたので、それなら本物をつけさせてやろうと思っただけである。		“不知你满意不。是托去香港的人买的，最近送了过来。”梶只是对年轻女子耳垂上悬挂的这件小东西感到新奇，其他的则概无兴致。说来也很简单：一次他发现杏子戴的是翡翠仿造品，于是想买个真货给她戴上。	A-38	あした来る人 (情系明天)
	夫の克平は会社の客と食事をするといっていたので、どうせ帰宅は遅くなるだろうと思って、八千代は先きに風呂にはいった。		丈夫克平说要陪商社客人吃饭，八千代想他反正很晚才能回来，自己便先进了浴室。	C	あした来る人 (情系明天)
	帽子を八千代が受取らないので、克平はそれを廊下の上に置いた。		见八千代不接帽子，克平便把它放在走廊上。	B-2	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	可哀そうであったが、睡いので腹が立った。		说起来它也是个可怜的东西，但干扰睡眠却叫人生气。	C	あした来る人 (情系明天)
	その日、克平は会社を退けると、珍しく早く家へ帰って来た。と、朝八千代と口論したので、彼女に気がねして早く帰ったわけではない。		这天，克平一下班就早早地赶回家来。这在他是很少见的。但并不是因为早上同八千代吵过架而心怀歉意。	A-53	あした来る人 (情系明天)
	ある雑誌社から頼まれている登山の随筆の締切りが迫っていたので、それを片づけたかったのである。		而是想把一家杂志社所约的登山随笔写完，因为马上就交稿期限了。	A-1	あした来る人 (情系明天)
	克平は山名と名乗るからには、この店の主人であろうと思ったが、相手が余り若いので戸惑った気持だった。		既然自报姓名，克平估计是此店的主人。但因对方过于年轻，又不禁有几分疑惑。	A-11	あした来る人 (情系明天)
「初め、この土間へ置きましたが、あまりなきますので、あけ方になってからお床の中へ入れました」		“一开始把它放到水泥地上来着。由于叫得太凶，天快亮时就塞进被窝里了。”		A-78	あした来る人 (情系明天)
「子供ですので、さびしいですわ、傍に人が居ればおとなしいんですけど」		“它还小，怕孤单。只要旁边有人就乖乖的了。”		C	あした来る人 (情系明天)
	時計をみると十時だった。いつもなら二人の若い女がミシンの音をやかましく立てているが、今日は日曜なので休んでいて、仕事部屋は静かだった。		一看钟，已经十点。若是往日，两个年轻姑娘早已经踏响嘈杂的缝纫机了。而今天是休息日，工作间里悄无声息。	C	あした来る人 (情系明天)
	自分の生涯というものは一つしかないもので、その点やり直しはきかない。		人生只有一次，一去不复返。	C	あした来る人 (情系明天)
	一子犬の血統書があるので、これも進呈したいと思います。		——一小狗有血统证书，准备一并奉送。	C	あした来る人 (情系明天)
	郵送すると小さく畳まなければならないので、なるべくはお手渡しした方がいいと思います。		但邮寄须折成几折，因此最好面交。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	今まで登山の語を聞いていたので、ひどく場違いの感じだった。		由于刚才听的是有关登山的话，现在不由感到有些驴头不对马嘴。	A-15	あした来る人 (情系明天)
「・・・日本では氷河がないので、雪山で練習しなければならぬんですが、ボーラー・メソッド(極地法)と言いますが、その課程をやった人でないと」		“・・・日本没有冰河，因此只能在雪山上训练，也就是所谓极地法。如果不是受过这种训练的人……”		A-37	あした来る人 (情系明天)
「そうでしょうなあ、それにしても、東京にはこういうところがあるので、うらやましいですよ」		“嗯。不过，东京能有这等地方，真叫人羡慕啊！”		C	あした来る人 (情系明天)
「別に、その時出任せを言っているわけではありませんが、何しろ、あの通り忙しいので、あとはずすぐ忘れてしまうんです」		“这并不是说他信口开河。他太忙了，一忙起来就丢在脑后去了。”		C	あした来る人 (情系明天)
	曾根は、一応結果を梶大助に報告しようと思ったが、彼が上京していないので、八千代からもらった名刺で夫の克平の勤め先を知り、会社へ行って、宿直員から、克平が多分ここに居るだろうということを知って訪ねて来たのであった。		曾根本来想把结果向梶大助大致报告一下，但对方没在东京。使用八千代给的名片找到她丈夫克平的单位，从值班员口中听得大概在这个地方，于是一路找来	B-2	あした来る人 (情系明天)
	このまま曾根を九州へ帰すのも悪いと思ったので、せめて銀座の酒場でも案内しようと思った。		//他想就这么把曾根打发回九州未免说不过去，至少该领他去一下银座的酒吧。	C	あした来る人 (情系明天)
「もらいたんですが、面倒臭いのでそのままになっています」		“//“想找是想找，但又嫌罗索，就一天天拖了下来。”		B-1	あした来る人 (情系明天)
「本当にごちそうになりました。僕は、折角上京したので、もう二三日、東京に居て、古本でも三部探します。・・・」		“实在谢谢您了！我来京一次不容易，就再呆两三天，找找旧书什么的。・・・”		B-1	あした来る人 (情系明天)
	女中は答えた。曾根は、梶大助が風呂をたいているはずがないと思ったので、+++「わたしが訪ねるのは、御主人です」+++と言ってみた。		女佣回答。+++曾根心想梶大助不可能烧洗澡水，便说：+++“我要拜访的是您家主人。”	B-2	あした来る人 (情系明天)
「あら、わたくしも三等でしたの。おかしいんですよ、来る時はお金がないのでいつも三等、でも帰りは二等なんです」		“哎呀，我也是三等。说来好笑，来家时因为没钱，总是三等；回去时是二等。”		A-1	あした来る人 (情系明天)
「ガス風呂にしたら便利ですが、父が風呂たきをしますので、改良出来ません」		“要是改用煤气就方便了。可是父亲要烧洗澡水，改不了。”		C	あした来る人 (情系明天)
	曾根は浴室から出ると、洋服を着ようか、そこに出ている着物を着ようか迷ったが、どうせこうなれば夕食はごちそうにならなければならないので、着物を借りることにした。		曾根从浴室出来，一时不知是穿西服，还是穿已经放好的和服。转念一想，反正今晚要在这里吃晚饭，索性借穿和服算了。	C	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
「この間は、風呂たきのことがどこかの新聞に書かれてまして、一それがまたほめてあるので、本人はすっかり気をよくしてー」		“最近、有家报纸登了一篇关于烧洗澡水的文章，还表扬他来着，他本人就更加得意忘形……”		B-1	あした来る人 (情系明天)
	藤川に来客があったので、それをしおに曾根と八千代は社長室を辞した。		因有别的客人来访，曾根和八千代借此机会离开了经理室。	A-10	あした来る人 (情系明天)
「わたくし、またこちらにきました折、藤川さんをお訪ねしてみます。あの方、小さい時、わたくしを可愛がってくれましたので、わたくしの言うことなら諾いて下さるのではないかと思いますの」		“以后我回来时，再去藤川先生那里看看。小时候，他很喜欢我。所以我想，要是我开口相求，他很有可能答应。”		A-36	あした来る人 (情系明天)
「わたくし、性格の強い主人を持っていますので、とても曾根さんが弱く見えませぬ、神さまのように」		“我丈夫一向刚愎自用，所以看起来您十分谨小慎微，象菩萨似的。”		A-36	あした来る人 (情系明天)
	克平の話では毎日の夕方に、「山小屋」で彼らの仲間の集りがあるということだったので、今日はそこへ行って彼等の話を傍聴しようと思ったのである。		克平告诉说，每周日的晚上他都同伙伴们在山小屋集中。因此杏子今天想去那里，旁听他们的谈话。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	もともとタクシーに乗り込む時から、克平をカガヨシに訪ねて行く気持は少しも持っていなかった。ただどこへ行き場のない気持だったので、タクシーをここまで走らせてみたまでのことである。		从上车时开始，她就根本没有去烤鸡店寻找克平的念头。所以乘车到此，不过是因为一时觉得无处可去而已。	A-43	あした来る人 (情系明天)
	プレーヤーは適当に取ってあるので、スカート感じもゆるやかで上品である。		由于下摆微微张开，整条裙子看上去舒展而典雅。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	アルさんは言って、グラスを口に運んだ。杏子は半年程だが、酒場に勤めていたことがあるので、もちろんこうした空気には慣れてはいるはずだったが、いったん遠ざかって、再び触れてみると、妙に浮わっている感じで着けなかった。		乙醇说着，端起酒杯。杏子半年前曾在酒吧打过工，对眼前的气氛自然习以为常。不过，一旦远离之后又重新身临其境，竟无端地心神不安起来。	C	あした来る人 (情系明天)
「はあ」杏子は、自分が以前酒場に勤めていたことを隠す気持はみじんもなかったが、嘘にとられそうな気がしたので、あいまいな返事をしておいた。		“啊。”杏子其实完全不想隐瞒自己曾在酒吧做工的过去，但怕别人不会相信，便随便搪塞一声。		B-2	あした来る人 (情系明天)
	そんなことを言いかけたが、その時、客が二人はいつて来たので、その方へ行った。		这时，又来了两个顾客，女店主往那边去了。	C	あした来る人 (情系明天)
	反対されると困るので、いよいよという出発間際になってから発表し、いっきにそれで押しきってしまう腹らしい。		想必他觉得说出来会遭到反对，因而打定主意，等到临出发时再宣布，继而一意孤行。	A-35	あした来る人 (情系明天)
	///克平は理由なしにこの女性に反感を持っていて、八千代が交際することをきらっているが、八千代の方は他に交際する相手がないのでつき合っている。		克平无端地对这位夫人怀有反感，不高兴八千代同其交往。而八千代此外又无人交往，所以仍未断交。	C	あした来る人 (情系明天)
	気に入った生地が二つ三つ目についたが、山名洋服店以外では購入できないという立場にあるので、いかんとも難しかった。		她发现两三种中意的面料，但由于现在处于只能在山名西服店选购的境地，只好快快作罢。	A-79	あした来る人 (情系明天)
	八鎖がついているので、八千代の足まではとどかず、何回もむだな努力を繰り返している。		由于拴着锁链，够不到八千代的脚，只是反复做着徒劳的努力。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	八千代はこの犬がロンというような西歐的な名前に、はなはだふさわしい犬だと思ったので、その時のことをいまでも記憶している。		八千代现在还记得，自己当时就觉得这狗同罗恩这一西洋名字风马牛不相及。	C	あした来る人 (情系明天)
	振り向いた八千代の眼には、杏子の姿が、まるで少女のように見えた。この店の女主人というので、幾ら若くても、自分と同年齢にはなっている女性を想像していたが、杏子の出現は八千代には意外だった。		八千代回头看去，在她眼里，杏子还是妙龄少女，本来她想，既是这店里的主人，再年轻也该有自己这般的年纪，结果完全出乎意料。	C	あした来る人 (情系明天)
	外国生地を専門に売っている店が日比谷のHビルの二階にあるので、そこへ出かけるつもりだったが、		日比谷H大厦二楼有一家专门出售外国布料的商店，准备到那里看看。	C	あした来る人 (情系明天)
	そう言ったので、杏子の気持は変わった。三沢も来るというのなら克平も来るかも知れないと思った。		经如此一说，杏子转了念头：既然三泽也来，那么克平也有可能出现。	C	あした来る人 (情系明天)
	喫茶店を出ると、杏子は、克平たちの遠征隊事務所が自分の店の二階へ来る時のことを想像したので、何か嬉しい気分がした。		走到街上，杏子想象着克平他们“远征队事务所”搬来自己店二楼时的情形，心里不免美滋滋的。	C	あした来る人 (情系明天)
「遭難者のあることは事実らしいが、それが克平だというニュースははいつていないらしい。ほかは遅れてはいつたので、朝刊の記事になるらしい」		“有人遇难怕是实有其事，但还没有消息说是克平。其他报社消息收到得晚，大概明天早上才会报道。”		C	あした来る人 (情系明天)
	杏子は郷里へ帰る時は、大抵信越線を利用していたので、中央線にはあまりなじみはなかった。		杏子每次回老家，大多利用信浓线，因此对中央线不太熟悉。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	松本に着いたのは五時ちょっと前だった。これに連絡している信濃大町行き電車が、構内の他のホームから出るはずだったので、杏子は鞆一つ提げて、足早やに陸橋を上って行った。		到松本时，差一会儿不到五点。与此相连接的开往信浓大町的电气列车该已驶入站内其他月台了吧。她提着一个皮包，步履匆匆地登上天桥。	C	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	既にホームには電車がついていたので、杏子はすぐそれに乗り込んだ。		列车已进入月台，杏子马上跨进了车厢。	C	あした来る人 (情系明天)
	一番電車だったので、数名の乗客があるだけで、車内はがらんとしていた。		由于是头班车，车内空荡荡的，乘客寥寥无几。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	「鹿島槍に知っている人が登ったんですが、遭難者があることが新聞に出ていたので、心配になって来たんです」+++素直に杏子は言った。		“有个熟人去登鹿岛枪，报上说有人遇难，就担心得跑来了。”杏子直言相告。	B-1	あした来る人 (情系明天)
	車窓から吹きこんで来る風が寒かったので、杏子は窓を閉めた。		从车窗吹进的风让人肌肤，杏子关上了车窗。	C	あした来る人 (情系明天)
	そんな気がしたので、杏子は、少しうるさかったが、相手になって受け答えをしていた。		而意识到这点的杏子尽管觉得对方有些饶舌，还是同其唱合。	C	あした来る人 (情系明天)
	「・・・昔から長男が家をつき、あとは村を出るしきたりで、村の戸数は十二戸以上に増えないんです。でも、この七月一日からは、大町に市制が布かれるので、鹿島も市の中へはいります」		“...按以往的习惯，只由长子继承家业，其余人都离村外出，因此户数一直不超过十二户。不过，从七月一日开始，大町实行市制，鹿岛也被划进了里边。”	C	あした来る人 (情系明天)
	杏子の郷里は犀川に沿っていたので、この溪谷の流れが速く郷里まで流れて行くのかと思うと、やはり多少の感慨なきを得なかった。		杏子の老家就在犀川岸边。想到这道山水将迢迢流向自己的故乡，她不禁生出几分感慨。	C	あした来る人 (情系明天)
	青年は村へ連絡するつもりで下山して来たのだが、巡回員に合ったので彼はまたそこから現場へ引き返して行ったという。		小伙子本来是下山找人的，因为遇到了巡回员，便直接赶往现场去了。	A-3	あした来る人 (情系明天)
	・・・わしはそんなばかことではないと信じられなかったが、巡回員がそういうので、半信半疑のまま、大町の警察と登山案内人組合の方に連絡しておいて、すぐその夜村から救援隊を登らせた。・・・」		“大我不相信会有这等荒唐事，但由于巡回员那样说，也就半信半疑地向大町の警察和登山向导协会取得联系，连夜从村里派人救援。”	A-17	あした来る人 (情系明天)
	内儀さんが、急の客でお茶を出すのが忙しそうだったので、杏子はそれを手伝ってやった。		杏子见老太婆忙着为这伙不速之客斟茶，便帮她一起忙起来。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	治五郎がきいた。学生たちは、来年の冬北槍へ登るので、その時に備えて、こんどは四班に別れて、その山の持つ四つの溪谷を探るのだと言った。		治郎五问。+++学生们说，为给明年冬天登北枪做准备，这次分成四个班，分别寻找这座山上的四条峡谷。	C	あした来る人 (情系明天)
	夕方から気温が下がって寒くなったので、杏子はずっと囲炉裏端に坐っていた。		到了傍晚，气温骤然下降，杏子只好守在地炉旁。	B-9	あした来る人 (情系明天)
	内儀さんが言ったので、杏子ははっとした。		听得老太婆如此说，杏子感到一阵潮热。	C	あした来る人 (情系明天)
	///今日降りて来なかったら、杏子はいつまでも彼を待っているわけには行かないので、夜の汽車で帰ろうと思った。		杏子想，如果仍不下来，自己便乘晚班车回去，总不能一直在这里等他。	C	あした来る人 (情系明天)
	「僕は昨日行ってみたが、危ないので引き返してきた。無理をすると、ああいうことになる」		///“昨天我去看过，因太危险，又折了回来。勉为其难势必出那种事。”	A-11	あした来る人 (情系明天)
	「僕は疲れているので眠りますよ」		“我累了，睡一觉。”	C	あした来る人 (情系明天)
	列車が新宿へ着くと、克平と杏子は同じ二等車の別々の降り口から降りた。だれか迎えに来ていないものでもなかったの、二人が一緒だったところを見られるのを避けたわけであった。		列车抵达新宿站。克平和杏子分别从同一二等车厢的两边车门走下来。或许有人接站，俩人想避免被人看见同在一起的情景。	C	あした来る人 (情系明天)
	「一回行っただけなので、向うは僕を覚えていませんよ」		“只去过一次，店里人是不记得我的。”	C	あした来る人 (情系明天)
	「いいえ、曾根さんです。夕方いらしたんです。出版のお話のできたので、そのお礼にわざわざ来て下さいましたの、・・・」		“不，是曾根君。傍晚来的。出版的事谈妥了，特意来表示感谢。”	C	あした来る人 (情系明天)
	「・・・もっと早くお帰りになると思っただけで、待っていただいていたんです」		“...以为您会再早一点回来，本来一直等待来着。”	C	あした来る人 (情系明天)
	家にあがると、ともかく曾根が帰るのを延ばして、自分の帰宅を待っていたというので、克平は大急ぎで着替えて、座敷へはいつて行った。食卓には料理がいっぱい並べられ、ビールの空壇が二三本並んでいる。		无论如何，曾根是为为自己而推迟回去，于是克平走进房间后，赶紧换上衣服，步入客厅。+++桌上满满摆着菜肴，还有两三只空啤酒瓶。	A-38	あした来る人 (情系明天)
	「わたしがお相手ですので、曾根さんお酒召し上がらないんです」		“因我坐陪，曾根君不肯喝啤酒以外的酒。”	A-10	あした来る人 (情系明天)
	「ブドウ酒が来ましたので、私もお仲間入りさせていただきます、曾根さんのために乾杯をしましょう」		“葡萄酒来了，让我也陪一下，为曾根君干杯！”	C	あした来る人 (情系明天)
	克平はリュックのことをきいた。リュックは登山家とも切っても切れない縁なので、その内容物が気になった。		///克平问起背囊来，由于这东西也总是同登山家形影不离的，他不禁关心起了里边的内容。	A-15	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	これは大変だと思ったので、克平は、+++「日本海は?」+++と方面を変えた。		克平思忖、如此下去可不得了，于是改问道：+++“日本海呢？”	A-38	あした来る人 (情系明天)
	昨夜曾根が一時ごろ父を訪ねると言っていたので、どうせ行くなら、彼の行くいっしょの時刻を避けようと思った。		昨晚曾根说一点钟左右到父亲那里去。那么既然前去，还是选择同一时刻为好。	C	あした来る人 (情系明天)
	「東京の支店ができたので、まあ、自祝の意味で、何となく人を招ぶんだ。・・・」		“在东京新开一家分公司，想自我庆贺一下，就找些人来。……”	C	あした来る人 (情系明天)
	「お父さまの会社にお祝いの宴会があるので、それに出ていただけないでしょうか。・・・」		“爸爸的公司有个庆祝宴会，说要请您出席。……”	C	あした来る人 (情系明天)
	///梶は、+++「そうです。こっちに支店が出来たので、人を集めて夕食を食べようかと思うんです」		“是的。在这里开了家分公司，想请人吃顿晚饭。”梶回答。	C	あした来る人 (情系明天)
	「ナベがこわれるほどうまいというので、そんな名前がつけられています。」		“所以叫这个名称，也就是因为它香得简直叫人恨不得连锅都吞进肚里。”	A-80	あした来る人 (情系明天)
	あまり曾根の顔が真面目だったので、八千代は、+++「はあ」+++と、どきまぎして答えた。		八千代见曾根表情过于认真，便有些不知所措，随口“啊”的一声。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	「どうにもならぬので、強引にカジカをやり通しました」		“由于钱实在不够，只好研究起杜父鱼来。”	A-79	あした来る人 (情系明天)
	だれも知った人はいなかったで、八千代は黙って、傍の人たちの話を耳にしなげら、フォークとナイフを動かしていた。		席间没有一个熟人，因此八千代只是一边默默听着别人的谈话，一边使用刀叉。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	まあを連発するよりほか仕方がなかった。どうも父が曾根を今夜の宴席に招ぶのも解せなかったし、三門けい子を紹介したのも解せなかったが、それでは藤川証券の方がだめなので、ふいに思いついて、新しいスポンサーを曾根につけるために、あのように取り計らったのかも知れないと思った。		八千代只能连道两个“这一”字。她并不明白今晚父亲为什么要请曾根并把三門敬子介绍给他，原来可能是这样的：父亲由于已经得知藤川证券公司加以拒绝，便突然心生一计，而用今晚这种形式为曾根物色一位新的赞助人。	A-16	あした来る人 (情系明天)
	///いつも六時半になると、克平たちがやって来て、二階で遠征の準備の雑多な仕事を始めるので、そこへ一度は顔を出し、手伝うことがあれば手伝ってもやるが、今日は杏子は彼等が姿を現す前に店を出た		往日，一到六点半，克平他们就来到二楼开始为远征做各种准备，每次她都上去打个照面，有需要帮忙的就帮帮忙。而今天杏子在他们出现之前就离开了。	C	あした来る人 (情系明天)
	そして雑踏の滴から外れたかったので、杏子は梶を誘うようにして歩き出した。		杏子想躲开人堆，只好和梶边走边谈。	B-9	あした来る人 (情系明天)
	「判りません。相手の人の気持は一。でも、そんなことはどうでもいいんです。ただ自分が苦しいので、自分がどうしたらいいか、それを教えていただきたいんです」		“不知道。那个人的心思……不过，他怎么想都无所谓。只是我自己很痛苦，所以才请您指点的。”	A-36	あした来る人 (情系明天)
	杏子はもちろんもう時刻が遅いのですぐ青山のアパートへ帰るつもりだったが、		时间已晚，杏子想马上回青山公寓。	C	あした来る人 (情系明天)
	こんどは烈しくつき当たったので、杏子は二三歩よろめいた。		这回撞得很猛，杏子趑趄了两三步。	C	あした来る人 (情系明天)
	このあたりは、何かと彼女を引き立ててくれている川辺夫人の家があって、そこへ何回か来ていたので、大体の地理には明るかった。		时常为自己拉生意的川边夫人就住在这一带。杏子来过几次，街道基本上是熟悉的。	C	あした来る人 (情系明天)
	大貫家はすぐ判った。杏子は門の前に立ち停まって、門を開けるのをちょっと躊躇したが、内部から下駄の音が聞えてきたので、思いきって門の戸に手をかけた。		大貫家很快找到了。杏子在门前站定，正当她犹豫着要开门的时候，里边传来木屐声响。于是她断然伸手开门，八千代正要往里边出来。	A-38	あした来る人 (情系明天)
	「お金の都合もありますので、少しぐらい遅くなることは、却って一、大変なお客さんでしょうか?」+++また八千代は笑った。		///接着，“由于经济上的关系，迟一点反倒……没见过我这样糟糕的顾客吧？”八千代又笑了。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	「・・・もっとも営業妨害になるので、無理には誘いませんが一」		“...当然罗，这事影响营业，也不勉强……”	B-3	あした来る人 (情系明天)
	三沢が言ったので、一同は道路を埋めているどす黒い人の流れから、どうにか押し出されるようにして、氷屋と中華料理店の間の路地にかたまって立つことが出来た。		听得三泽说，一行人死命挤出路上黑压压的人流，在冰室和中华饭店之间的巷口立住脚步。	C	あした来る人 (情系明天)
	杏子は大変なところへ来たものどと思った。しかし発起人のアルさんに悪いので黙っていた。		杏子暗暗叫苦，居然来到这么个要命地方。但由于怕使发起人难堪，她始终没有开口。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	「席を売っていたので買ったよ。すぐこの高台で、神社の裏手だそうだ」		“有卖座位的，我买好了。就在那边高台上，神社后院。”	C	あした来る人 (情系明天)
	杏子はみなにはぐれたので、到底一人で道路の雑踏の中へ降りて行く気にはなれなかった		由于同大家走散，杏子再没心思独自下到路上那般拥挤不堪的人堆里去。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	「わたし、全然、そんなこと知りませんので、一悪いこととは思いました」		“这我可一点也不不知道……我真是做了件蠢事。”	C	あした来る人 (情系明天)
	補途が思いやられるので、火花が終らない前に、一同は席を立った。		由于担心归途难走，在烟花结束之前，几个人便起身离开了。	A-15	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	銀座へ帰る女店員二人と、上野に帰る三沢が、同方面なので一台に乗り、アルさんと克平と杏子は、他の一台に乗ることにした。		回銀座の兩名女店員和回上野の三沢因为方向相同，坐同一辆；乙醇、克平和杏子坐另一辆。	A-1	あした来る人 (情系明天)
	アルさんが克平と三沢の居る方へ歩き出したので、三人の女も彼について行った。		乙醇朝克平和三泽那边走去，三个女士也跟在后面。	C	あした来る人 (情系明天)
	いつも克平、克平と呼び棄てにしていたが、八千代の前なのでアルさんは克平を君づけに言った。		平时，乙醇一口一个克平，这次因当着八千代的面，便在克平后面加了个“君”字。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	余りしゃべらん方が無難だと思ったので克平は口をつぐんでしまった。		他想，还是缄口为上策，便不再开口。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	玄関のベルが鳴ったので、梶は如露を持ったまま、玄関の方へ回って行った。		听得门铃响，梶手提喷壶向大门口拐去。	C	あした来る人 (情系明天)
	また呼ばれたので、梶はたち止まった。		听女儿再次招呼，梶止步站住。	C	あした来る人 (情系明天)
	女中にふかせるより、自分でふいた方がきれいになると思ったが、梶はまたたしなめられそうな気がしたので我慢した。いったんは我慢したが、やがてまた彼は立ち上がった。		梶本来想还是自己动手扫得干净，但又担心受挖苦，便忍着未动。但过了一会，还是起身走了。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	「さあ、食べて下さい」とか「どんどんあがって下さい」とか、梶は言うが、客にしても、家人にしても、梶が全然作業に忙殺されて、箸を取らないので、余り食べたような気はしないのである。		“喂，只管吃”，“别客气”——尽管这样讲，但客人也好，家人也好，见梶忙得不可开交，顾不上动筷，也都没心思吃了。	B-3	あした来る人 (情系明天)
	「・・・家人の方は慣れているので平気だが、客の方はどうであろうか？」		“・・・家人因习以为常，自然不在乎，但客人方面如何呢？”	A-10	あした来る人 (情系明天)
	八千代は応接間にはいったが、父と客が熱心に話し込んでいるので、入口に立ったまま、二人の話を切れるのを待っていた。		八千代走进客厅。因父亲和客人正谈在兴头上，只好站在门旁，等候两人谈话告一段落。	B-9	あした来る人 (情系明天)
	八千代は曾根の出版が、三門けい子の世話になるより、できれば他の人の方で世に出ることを望んでいる自分に気が付いた。そして父では母がききそうもなかったの、+++「出版費用で苦しんでいらっしゃると思うんです。あの方+++八千代は酒井信輔の方に向って言った。		八千代意识到自己有这样一种心理：可能的话，还是借助于其他人的力量使曾根的著作问世，而不想让三門敬子染指。由于父亲似乎一时别无良策，便转向酒井信辅说：“+++他正因出版经费弄得焦头烂额。”	B-2	あした来る人 (情系明天)
	梶には、三門けい子に頼んだので、その方の面子を立てなければという考えがあったらしかったが、・・・		由于他求过三門敬子，因此不想伤其面子。	A-20	あした来る人 (情系明天)
	「いいえ、お父さまは仕事があるので、それでいいですが、母さんは可哀そうですね、いつか、あんなになって」		“您因为工作，自然不以为然，可怜的是我母亲，变成了那副样子。”	A-1	あした来る人 (情系明天)
	伊豆の海岸の美しいことは、何回も人から聞いていたので、そこを車を走らせてみたいと思った。		她听人好几次说起伊豆海岸很美，于是最后决定走海边。	A-38	あした来る人 (情系明天)
	運転手は中年の親切そうな人物だったので、八千代はその自動車で三津まで行ってもらうことにした。沼津の市中を抜けて、十分程すると、海岸へ出た。		司机是中年人，态度很热情。八千代便请他开车把自己送往三津。穿过沼津市区，不到十分钟汽车便开上了海岸公路。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	「・・・私が行くといいんですが、道が不案内なので、土地の自動車を頼んで来ようと思いますが、どうでしょう」		“・・・我也去可以，但道路不熟，所以想请当地司机把您送去，您看好么？”	A-36	あした来る人 (情系明天)
	「そうですね、でないと、修善寺へ出て達磨山を越えるので、もっと大変です」		“是啊，不然，就要开去修善寺，翻达摩山，那更不得了。”	C	あした来る人 (情系明天)
	少し軽率だとは思ったが、しかし、人のいい親切なところがある運転手なので、憤るわけにも行かなかった。		八千代想，此人未免有点轻率，但由于他有热心之处，她也不好发火。	A-17	あした来る人 (情系明天)
	「バスが一日三回往復しているんですが、道幅が狭いので、その時刻を外さないと通れないんです」		“公共汽车一日往返三班，因为路窄，要错过那个时刻才开得过去。”	A-2	あした来る人 (情系明天)
	部落へはいると、道幅が狭い上に、道があちこちで直角に折れ曲っているの、すぐ自動車は動けなくなった。		进得村，路窄还不算，而且到处是急转弯，汽车很快就动弹不得了。	B-1	あした来る人 (情系明天)
	///八千代は、曾根の部屋が二階だというので、階下へ部屋を取ってもらった。		听曾根住二楼，八千代便在楼下开了个房间。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	「漁師です、僕一人では母がつかないの、手伝ってもらっているんです」		“鱼夫。我一人忙不过来，请他们帮帮忙。”	C	あした来る人 (情系明天)
	八千代は二十分程、彼等の単調な作業を見ていたが、真上からの陽を浴びているのが苦しくなったので、磯から上がり、神社の境内へとはいつて行った。		八千代看了二十分钟他们这种单调的作业。由于阳光劈头盖脸晒得难受，便离开沙滩，走进神社院内。	B-2	あした来る人 (情系明天)
	「・・・冬なら漁船の底びきに頼むんですが、夏は底びきをやらないので、一匹一匹すくわなければならんです」		“・・・若在冬天，可以请渔船拖网帮忙；夏天因为不用拖网，只好一条一条地捞。”	A-81	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	明るいので眠れないかと思ったが、床へはいると、昨夜ほとんど眠っていないので、すぐ眠りに落ちた。		本以为明晃晃的无法入睡，但一躺下，由于昨晚几乎一夜没合眼，很快就睡着了。	C	あした来る人 (情系明天)
	明るいので眠れないかと思ったが、床へはいると、昨夜ほとんど眠っていないので、すぐ眠りに落ちた。		本以为明晃晃的无法入睡，但一躺下，由于昨晚几乎一夜没合眼，很快就睡着了。	A-78	あした来る人 (情系明天)
	その夜、昼間眠ったので八千代は眠れなかった。		夜里，因白天已经睡过，八千代未能入睡。	A-10	あした来る人 (情系明天)
	戸田でも一日中夏の強い陽光に照らされた生活をしていたので、汗の吹き出すのには慣れてはいたが、ここでは舗道の照り返しが辛かった。		尽管他在户田每天都在夏日强烈的阳光下曝晒，对出汗早习以为常。但现在水泥路面面对太阳热能的反射却使他不堪其苦。	C	あした来る人 (情系明天)
	曾根は煙草屋の娘に言われたように、洋服店の一軒でたずねて、やっと探している店の所在をつきとめることができた。教えられたその店の前へ行ったら、洋服店らしくないので、曾根はすぐそこへは行って行くのを躊躇した。		曾根按香烟铺少女说的到一家西服店打听，好歹弄清了自己所要找的那家店的具体位置。可是摸到那家店前一看，却不象西服店的样子，一时犹豫着不敢贸然进门。	C	あした来る人 (情系明天)
「・・・低地食糧は、われわれ三人の一週間分を一包みにしますが、中間地食糧になると、シェルパ五人が加わるので、八人分のものを用意しなければなりません。・・・」		“低地用糧打成一包，够我们三人吃一周就行；而中间地用糧，由于有三名舍帕族向导加进来，就必须准备八人用量，而且要把每两天用量分别打成一包。・・・”		A-78	あした来る人 (情系明天)
	みんなそれぞれ、このところ会社の方も家の方も留守にしていたので、いろいろな用事がたまっているらしかった。		前几天里，他们一直把单位和家庭抛在一边，因此现在一定有很多事务需要回去处理。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	アルさんが三沢のことをマネージャアと呼んだので、+++「あら、三沢さんがマネージャアですの?」+++と杏子はきいた。		听得乙醇称三泽为干事，杏子问:+++“哦，三泽君是干事?”	C	あした来る人 (情系明天)
	///杏子は克平と二人だけになるのが難しいと思っていたが、案外簡単にみんなが出て行ったので、むしろ気抜けのした気持だった。		杏子本以为难得只剩自己和克平两人。不料众人却如此迅速地一哄而散，反倒有些意犹未尽。	C	あした来る人 (情系明天)
	暗かったので、お互いの顔は判らなかつたが、		天已黑了，互相看不清脸面。	C	あした来る人 (情系明天)
	イダテンカジカの収集も終わったので、曾根はいつ戸田を引き上げてもよかつたが、そのまま宿で何日かを過した。		飞毛腿杜父鱼已经采集完毕，曾根本来随时都可离开户田，但他仍在店里住了几天。	C	あした来る人 (情系明天)
	危いので、舟に乗せることができないのだ。		因有危险，不便领他们上船。	A-10	あした来る人 (情系明天)
	いかにも、出版の話ができてしまったので、急にいい気になって、ずばらを決め込んでしまったと思われても仕方がない。		说不定对方会以为自己由于出版指日可待便得意忘形地久不复作。而这种想法也是情有可缘的。	A-16	あした来る人 (情系明天)
	曾石油罐二個持っているので、電車やバスに乗ることをあきらめたのである。		由于带有两个铁筒，只好放弃电车或公共汽车。	A-79	あした来る人 (情系明天)
	梶助は、曾根が嗚咽で身体を震わせ始めたので、さすがにこれには驚いたらしく、煙草をはさんだ手を口の前でとめたまま、暫く、そんな曾根の姿に見入っていたが、		梶大助见曾根呜咽得浑身颤抖，到底为之讶然。他挟烟卷的手停在唇前许久不动，目不转睛地看着曾根。	C	あした来る人 (情系明天)
	梶は克平の口から出た言葉が、余りにも予想していたことと違っていたので驚いた。		梶猛地一惊，克平说出的话出于出乎意料。	C	あした来る人 (情系明天)
	なるべく八千代との事件もあるので、金のことは梶大助には頼みたくなかつたのだが、		由于同八千代之间不寻常的关系，他不想在金钱上求助梶大助。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	出発の日がすぐ間近に迫っていたので、背に腹はかえられぬ気持で、梶にひと肌ぬいでもらおうと思ったのである。		但出发日期迫在眉睫，只好以孤注一掷的心情请梶大助助一臂之力。	B-9	あした来る人 (情系明天)
	八千代が大阪へ戻って行ったので、二人の間のことを梶は知らないはずはなかつた。		八千代已回大阪，梶不可能不知道两人间的事。	C	あした来る人 (情系明天)
	「そういう時期はだれにでもやってくる。その時にこわれてしまう夫婦もあれば、面倒臭いので我慢して押し通してしまう夫婦もある。・・・」	“每个人都会遇到这种时期。届时，有的夫妇干脆分道扬镳；有的夫妇因嫌麻烦而凑合下去。・・・”		A-82	あした来る人 (情系明天)
	克平たちの出発は九月十日に決っていた。その出発の日まで五日程しかなかったので、克平も、三沢も、アルさんもそれぞれ忙しい毎日を送っていた。		克平的出发时间定在九月十日，仅仅还有五天时间。因此，克平、三泽和乙醇每天忙得不亦乐乎。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	///大小の壮行会が毎晩のように行われたし、三人ともそれぞれ勤めを持っている身なので、会社の仕事も一応格好をつけておかなければならなかつた。		大小壮行会每晚应接不暇，而三人由于都有工作在身，公司那边也必须大致应付过去才行。	A-15	あした来る人 (情系明天)
	克平は更に十分程待ったが、杏子は姿を見せなかつた。約束をしたのが五六日前のことなので、杏子が日でも間違えているのではないかという考えが、		又等了十多分钟，杏子还是没影。克平心里一阵不安：五、六天以前约定的，杏子会不会记错日期呢？	C	あした来る人 (情系明天)
「遅いので日でも間違えたかと思いましたよ」		“这么晚，我还以为你记错日期了。”		C	あした来る人 (情系明天)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
運転手は、女客が居なくなったので、親しさをその言葉に現わして言った。		///司机见女客已不在, 语气中多了一层亲切意味。		C	あした来る人 (情系明天)
「・・・標本の大部分が東京の研究所に置いてありますので、ここを離れではできない仕事です。・・・」		“...大部分标本都放在东京的研究所里, 离开这儿没办法工作。”		C	あした来る人 (情系明天)
八千代は曾根より十分程前に待合室に姿を現わしていた。が多勢の人が克平を取り巻いていたので、まだ克平に言葉をかけていなかった。			八千代は先于曾根十多分钟出现在候机大厅的。由于很多人簇拥着克平, 还没来得及同他话别。	A-15	あした来る人 (情系明天)
「大阪の社長から電報が参りましたので、お届けに来ました」		“大阪经理打来电报, 给您送来了。”		C	あした来る人 (情系明天)
「わたくしの方は、近くまた父が上京して来ますので、その時、父と一緒に帰ろうかと思ひます。でも、いずれにしても四五日は居ますわ」		“家父最近还要来京, 到时候我想跟他回去。但不管怎样, 四、五天内还要在这里的。”		C	あした来る人 (情系明天)
【気持がいいので歩いている。すっかり秋だな】		“怪高兴的, 走一走。完全是秋天啦!”		C	あした来る人 (情系明天)
	曾根は食欲を感じなかったので、食膳をサイドテーブルの上に移すと、その昏りにノート大のカードを机の引出しから取り出して、机の上に置いた。		曾根没有食欲, 慢悠悠地吸完一支烟, 拿起钢笔。他	C	あした来る人 (情系明天)
	秋が急にやって来たので、どの客もあわてて秋の支度に取りかかるのか、性急な注文ばかりだった。		秋天突然降临。因此顾客大概都急于准备秋令服装, 无不要求尽快交货。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	お別れした晩、お話しできなかったことで、その後、やはりお話ししておいた方が、貴方様のためにも、わたくしのためにもいいのではないかと思われることがありますので、それを申し上げようと、ただいまこのペンを取った次第でございます。		分手那天晚上, 有件事未能出口。事后我想, 恐怕还是说出来无论对您还是对我都有好处。因此我现在拿起笔来, 准备把这件事告诉您。	A-37	あした来る人 (情系明天)
	ことに杏子には、まとまった額の大金を出しているのに、なにも二十円のことで恐縮するてはなかったが、梶はいつもこうだった。		尤其在杏子身上。他大把大把地出钱, 本来大可不必为二十元不好意思, 但梶却总是这样。	C	あした来る人 (情系明天)
	藪が多いせいでもあるが、一帯は山蔭でもあったので、家々はうす暗く、陰気だった。		由于多竹丛, 加上背山而居的缘故, 村里的家家户户无不显得昏暗而阴森;	A-15	越前竹人形 (越前竹偶)
	仕事場で物音がしなくなったので、喜助は不審に思って小舎に走り入った。		喜助发现作业场一片沉寂, 心里感到奇怪, 便奔进那间棚棚似的小屋。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜左衛門の葬式は、竹神に寺はなかったのに、部落が永代菩提寺になっているひと溪向うの広瀬村の瑞泉寺で行われた。		由于竹神村没有寺院, 喜左卫门的葬仪在面溪而立的广瀬村的瑞泉寺举行。	A-15	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助もそれらの町々へつれられていったこともあるが、いずれも少年時だったのに、会った人のことは忘れてしまっていた。		喜助常陪着父亲到那些城镇去, 由于这些都是少年时期的事情, 喜助早就记不得当时曾见过什么人了。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	亡父と単なる知己ではないように思えたので、喜助は勇気をだしてきたのだった。		喜助觉得她同父亲的关系不像是单纯的好朋友关系, 所以才鼓起勇气这么发问的。	A-83	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は背がひくかったので、劣等感をもっていた。		喜助个子矮小, 所以有一种自卑感。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	下を向いたまま女の顔は見ず、座を白けさすような気づまりを皆にあたえるので、自分からすぐにひきあげてきた。		低着头不看她们, 这样, 一种冷场的气氛感染了大家, 令人发窘, 于是喜助马上退席。	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は温泉街を歩いていった。人通りは多かった。雪がとけたので近からどっと押しよせてきた湯治客である。		喜助在温泉街上走过, 路上的人很多, 都是来温泉洗澡的客人, 因为雪融化了, 附近的人们便络绎不绝地涌向温泉。	A-1	越前竹人形 (越前竹偶)
	娼妓は喜助の軀をじろじろみていた。子供のように思ったのだが、よくみると大人びた顔をしているのでびっくりしたように眼を腫いて、		妓女从上到下打量着喜助, 她觉得喜助的身材还像个孩子, 但是仔细瞧去, 一张脸却是大人相了, 所以瞪着一双吃惊不小的眼睛, 心不在焉地嘟囔了一句:	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助の顔つきが真剣にみえるので、娼妓も真顔になって話しつづけた。		妓女看到喜助的神态很认真, 也就一本正经地继续说:	B-1	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は、びっくりした。妙なことを玉枝がきくと思ったので、すぐこたえた。		喜助听玉枝这么发问, 吃了一惊。他觉得玉枝真是提了一个怪问题, 所以马上回答:	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	知りまへんという声に投げやりなものがひびいているので、喜助は、+++「知りまへんて……死なはった・どすか」+++とまたきいた。		喜助听玉枝的语音里有着明显的绝望感, 便又问道:+++“不知道……是去世了么?”	B-2	越前竹人形 (越前竹偶)
	その事情をいにくそうにした玉枝の顔を、喜助はみるにしのびなかったのに、それ以上訊ねようとはしなかった。		玉枝对这段隐情好像很难启口, 喜助不忍卒睹玉枝为难的神色, 也就没有再问下去。	B-1	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は健康な玉枝をみると話だけをしに部屋へ上ることにためらいを感じたので、客のような顔をして上った。		喜助看到玉枝恢复了健康, 觉得光为了要讲的话而进屋去是否好呢, 不免有点犹豫, 于是摆出一副狎客的神气走进屋。	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	玉枝は喜助の真剣な物言いに打たれた。しかし、それが、あまりに突然だったので、+++「あてが、喜助さんのお嫁さんになるのどすかいな」+++と冗談のようにいって、歯をみせて笑った。しかし、すぐその顔をもとにもどして喜助の方をみた。		喜助の真挚情感动了玉枝。可是，这也实在来得太突然了，所以玉枝以开玩笑的口气说道：“目的是要我做喜助的媳妇。”说着，露出牙齿笑起来，但又立刻恢复了原来的神态，望着喜助。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	梅雨があけて、陽照りがつづくと、土は固くなってくる。植えかえの時期を逸してしまうと思ったので、喜助はひとりで植えかえた。		黄梅季节已经过去，太阳直射地面，土质一天硬似一天。喜助怕错过移植的好时节，便独自一人进行移植。	B-2	越前竹人形 (越前竹偶)
	竹細工も休んだので芦原へゆく用事はなかった。		连竹工艺品也搁下不做了，所以没有什么事要上芦原去。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜左衛門の手ほどきをうけたので、竹細工を業とするものはいだけれど、いずれも、専門に励んでいる者はいない。		人们受到喜左卫门的指点，从事竹工艺品的生产，但是谁也没有把竹工艺作为自己的专业来对待。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は、はじめは、竹神を訪ねてきた時の、ケツトをきた玉枝の像をいっしんに作っていたが、ほぼ出来あがりかけた時になって、玉枝が自分のところへ嫁入ってきてくれることになったので、それではもの足らなく思えてきたのだった。		喜助一心打算做一只身披斗篷、第一次来竹神村时的玉枝像，这像行将完成的时候，玉枝本人嫁了过来，于是喜助对这像感到不够满意。	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)
	役人の中で、竹神の竹藪をみた者はいなかったの、県知事に詳しく説明する者はなかった。		知事属下的官员当中，没有人见到过竹神村的竹丛，所以没有人能向县知事作详细的说明。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	///鯨島は、最初、この男があつた竹人形をつくった氏家喜助であろうとは想像もつかなかったの、+++「氏家喜助さんおられますか」+++ときいた。		///鯨岛起初根本想都不曾想过，这人竟会是那只竹偶的制造者氏家喜助，所以鯨岛问道：+++“氏家喜助先生在家吗？”+++	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	鯨島は好奇心眼もとのこの光景をみていたが、喜助が母屋の方へ案内するので、作業場をもう少し見学したい心のこりの顔をしながら、尾いていった。		鯨岛以好奇的眼光望着这番情景，由于喜助在前面带路往正屋走去，鯨岛只好带着想再稍稍参观一下作业场的遗憾神情，尾随喜助而去。	A-79	越前竹人形 (越前竹偶)
	鯨島は、ついで、北陸のこのような山奥の村の家に入ったことがなかったので、家屋構造自体が古美術のような思いもたらしく、じろじろ見廻しはじめた。		鯨岛从来没到北陆道的深山僻乡作过客，他大概觉得这些房屋构造的本身就就像古典艺术品吧，所以瞪大眼睛在屋内扫视起来。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	「じつは、わたくし、『岩田屋』の展示場で拝見した竹人形があまり立派でしたので、あれを京の人形問屋へ卸して下さらんかとお頼みにあがったようなわけでして」		“说实在的，我在‘岩田屋’的展销会场上拜见到了那竹偶，真是巧夺天工！我到这里来，为的是恳请您是否可以把竹偶批售给京都的玩偶批发铺。”	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助は風のかげんで、にわかにくすぶりはじめた囲炉裡の白煙が顔にふりかかるので、眼をしわばませていたが、じっとだまって耳をたてている。		突然吹来一阵风，地炉里刚刚冒起的白色烟雾朝喜助的脸上扑来，喜助皱着眉头，始终一声不响地竖起耳朵倾听。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	///忠平は鯨島に教えられたとおりに先ず小舎をのぞいてみたが、うす暗い小舎には人影がなかったので、母屋の戸をあけて声をかけた。		这忠平按照鯨岛的指点，先到小屋去张望了一下，昏暗的小屋里不见人影，于是来到正屋的门口，叫道：	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)
	夜のうちに、十体の人形をそろえるのだから、当然、喜助ひとりでは時間がかかると思われたので、母屋の仕事を放ったらかして玉枝は急いで小舎へ入った。		玉枝想，一个夜晚要备置十只成品竹偶，靠喜助一个人当然来不及，于是，她搁下了正屋里的家务，急忙走进小屋。	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)
	新作の出足の早いのは、他の人形の場合にもいえることだったが、竹人形だけは、精緻につくられている上に珍しいので、いくら仕入れてもストックになる心配はないと思えた。		/// 店老板知道，大凡新奇的东西，销路总是快的，应当说，其他种类的玩偶也碰到过这种情形。但是唯有竹偶，由于制作精巧并罕见，不论采购多少也不用担心会积压在仓库里。	A-15	越前竹人形 (越前竹偶)
	忠平は母屋を覗いて玉枝をさがしたが姿はなかったので、小舎に入った。		忠平朝正屋探望了一下，不见玉枝的身影，于是走进小屋。	A-38	越前竹人形 (越前竹偶)
	娼妓時代は、もちろん、避妊具は使用した。けれども、客によっては嫌う者もいたので、それを使わないですませたこともある。そんな場合にだって、妊娠したことは一どだってない。		在当妓女的时期，当然，玉枝是使用避孕工具的。但是有的嫖客讨厌避孕工具，所以有时就不用。即使在那种情况下，玉枝也从来没有受孕过。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)
	内科医院とした看板のすみに、婦人科と小さくかかれてるのがみえたので心づよく思い、恰好の医者がみつかったと喜んで入ったのであった。		玉枝发现，在“内科医生”这块招牌的角上还写有“妇科”的小字，这使她胆壮不少。她觉得找到了一个合适的医生，所以高高兴兴地走进去。	B-5	越前竹人形 (越前竹偶)
	喜助には大四郎のいったことはうなずけなかったのだ。しかし喜助も気にはなつたので、夕刻になって職人たちが家へ帰ったあと、母屋にもどって食膳についたとき、こんなふうには玉枝に問いかけている。		喜助不能同意大四郎的说法，但也有点儿放不下心来。傍晚，工匠们都已回家，喜助回到正屋吃晚饭，他便对玉枝说道：	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	白けた沈黙がふたりきりの母屋の静寂をながれたので、喜助は気まずそうな横顔を見せておれた。		一种不舒服的沉默在寂静中飘过。喜助的侧脸好像颇不愉快，他的神情沮丧。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	あまりみつめられるので玉枝は逆に顔を伏せて、		由于盯得太过分，反而使玉枝低下了头。玉枝说：	A-84	越前竹人形 (越前竹偶)
	玉枝はひっそりした旅館らしいのでほっとした。		看来，这是一家安安静静的小旅馆，所以玉枝松了口气。	A-36	越前竹人形 (越前竹偶)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	玉枝に無理矢理 盃 をもたせるので、玉枝は酒をうけるだけはどうけて、卓の上においた。		忠平将酒杯往玉枝手上递。+++ 玉枝只好接过酒杯。	B-9	越前竹人形 (越前竹偶)
	玉枝は下腹の鈍痛が次第にひどくなりはじめたので、京都駅に下りた時、待合室のベンチにすわってしばらく痛みをこらえていた。前日の朝、越前を出て、夕方に京都へつき、それに昨夜は忠平に荒々しく乱暴された。駆もくたくたになっている上に、衝撃をうけたので、胎児も動きはじめたのだらう。		玉枝在京都站下车时，由于小肚子已不是隐隐作痛而是越痛越厉害，她便在候车室的长凳上坐了一会儿，解除一些疼痛。当时玉枝心想：“前天早晨离开越前，晚上到京都，加上昨天夜里被忠平粗野地折腾了一阵，本来就精疲力竭的身体还承受过分的压力，难怪要牵动胎儿了。”	A-16	越前竹人形 (越前竹偶)
	玉枝は下腹の鈍痛が次第にひどくなりはじめたので、京都駅に下りた時、待合室のベンチにすわってしばらく痛みをこらえていた。前日の朝、越前を出て、夕方に京都へつき、それに昨夜は忠平に荒々しく乱暴された。駆もくたくたになっている上に、衝撃をうけたので、胎児も動きはじめたのだらう。		玉枝在京都站下车时，由于小肚子已不是隐隐作痛而是越痛越厉害，她便在候车室的长凳上坐了一会儿，解除一些疼痛。当时玉枝心想：“前天早晨离开越前，晚上到京都，加上昨天夜里被忠平粗野地折腾了一阵，本来就精疲力竭的身体还承受过分的压力，难怪要牵动胎儿了。”	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	ひと昔前の記憶はうすれていたのて、叔母の家を探すのには骨が折れた。		由于隔了这么些年，记忆淡薄，所以玉枝为寻找姑母的住房大费周折。	A-18	越前竹人形 (越前竹偶)
	///折原家から嫁に行ったものは、その家の次男坊である佐木田勇二郎という、当時人力車夫をしていた男のところへ嫁いでいたので、本家から一町ばかりはなれた桑畑の中の小さな分家に住んでいた。その勇二郎叔父も五年前に死んでいる。六十近くなるはずのもの叔母は、働かずには暮してゆけないので、中書島へ通っているのてであった。		佐木田門从折原家嫁过来，给佐木田家的次男——人力车夫佐木田勇二郎做媳妇，小两口子在距大家庭一百来米的桑地里另立了一个小家庭。姑丈勇二郎五年前死了，年近六十的姑母佐木田門非得自食其力不可，便上中书岛找事干了。	C	越前竹人形 (越前竹偶)
	///折原家から嫁に行ったものは、その家の次男坊である佐木田勇二郎という、当時人力車夫をしていた男のところへ嫁いでいたので、本家から一町ばかりはなれた桑畑の中の小さな分家に住んでいた。その勇二郎叔父も五年前に死んでいる。六十近くなるはずのもの叔母は、働かずには暮してゆけないので、中書島へ通っているのてであった。		佐木田門从折原家嫁过来，给佐木田家的次男——人力车夫佐木田勇二郎做媳妇，小两口子在距大家庭一百来米的桑地里另立了一个小家庭。姑丈勇二郎五年前死了，年近六十的姑母佐木田門非得自食其力不可，便上中书岛找事干了。	B-2	越前竹人形 (越前竹偶)
	///しかし、土堤に出るまでには、腹痛が激しいので時間がかった。		///由于腹部疼痛激烈，玉枝花了不少时间才到达河堤。	A-15	越前竹人形 (越前竹偶)
	洗った裾がなかなかかわかなかつたので、渡し場の小舎で火を焚き、温めてくれた青のいっときのあいだ、いろいろと話をしているうちに、船頭の情が、玉枝を温かく包んだのであった。		由于洗过的衣服下摆一时干不了，老船家便在渡口的小屋里生起火来让玉枝暖和暖和。他俩在那短暂的夜间交谈了各种各样的事情，老船家的同情心温存地裹住了玉枝。	A-16	越前竹人形 (越前竹偶)
	///即死したものの他は、みんな焼けただれた身を広島周辺の三次、庄原、東城などに収容されたので、小島村では消防団員が木炭バスで広島の焼跡へ出勤し、つづいて終戦の日の早朝、勤勞奉仕の青年団員が、三次や東城の仮収容所へ怪我人を探しに行った。		除了当场被炸死的之外，全都烧得满身是伤，被收容在广岛附近的三次、庄原、东城等地。为此，小島村派出消防团员，乘坐木炭车，出发到广岛被烧毁的地方去，接着在停战的第二天早上，义务劳动的青年团员到三次、东城的临时收容所去寻找伤员。	A-42	黒い雨(黒雨)
	怪我人たちは耳だけはみんな聞えるので、一人一人から名前を聞きながら、丸裸のものには皮膚に墨汁で名前を書き、布ぎれを少しでも着けているものにはそれに名前を書いた。怪我人たちが苦しがりて呻いたり動いたりして位置を変えるので、お粗末だがそうでもしなくては人別して行くことが出来なかつた。		但受伤者的耳朵却还能听得见，所以我们一边一个地询问他们的姓名，一边在光着身子的人的皮肤上用墨汁写上姓名，对那些身上还挂着几丝破布条的人，就把名字写在那破布上。受伤者痛苦万分，又是哼又是滚的，来回直折腾，这样做虽然简单了些，但不这样做就分辨不出人来。	A-36	黒い雨(黒雨)
	怪我人たちは耳だけはみんな聞えるので、一人一人から名前を聞きながら、丸裸のものには皮膚に墨汁で名前を書き、布ぎれを少しでも着けているものにはそれに名前を書いた。怪我人たちが苦しがりて呻いたり動いたりして位置を変えるので、お粗末だがそうでもしなくては人別して行くことが出来なかつた。		但受伤者的耳朵却还能听得见，所以我们一边一个地询问他们的姓名，一边在光着身子的人的皮肤上用墨汁写上姓名，对那些身上还挂着几丝破布条的人，就把名字写在那破布上。受伤者痛苦万分，又是哼又是滚的，来回直折腾，这样做虽然简单了些，但不这样做就分辨不出人来。	C	黒い雨(黒雨)
	怪我人の火傷の苦しみ以外の苦痛も何に原因しているか知れないので、ともかくバントボンという薬を注射して、六人だけの苦痛を一時的に和らげた。		受伤者除火伤的痛苦之外，为什么还有另外的痛苦，其原因不得而知。因此，不管三七二十一，都注射了鴉片全鎮痛劑。只有六个人暂时减轻了痛苦。	A-37	黒い雨(黒雨)
	家が十五度ぐらい傾いているので防空壕の入口でこの日記を書く。		房子倾斜了十五度左右，这篇日记是在防空壕的入口处写的。	C	黒い雨(黒雨)
	今日は幾らか思考力が復活しかけたような気がするのて、六日以来の出来事を思い込んで行くことにする。		今天我感到思考力好象有所恢复似的，所以决定把六天来发生的事，再回顾一下。	A-36	黒い雨(黒雨)
	人の噂では、能島さんは松本さんという左翼学者と以前から親しいので、戦争が苛烈になってからは当局の目を逸らすため町内づきあいに気をつかっている。松本さんはアメリカの大学を卒業し、戦争前にはアメリカ人と文通していたので憲兵隊に何度も呼び出されたことがある。		据传，能島先生与一个姓松本的左翼学者一直很亲近，所以打战局日趋激烈以来，为了逃避当局耳目，他在与街上美国的来往中比较注意。松本先生毕业于美国的大学，战前，和美国人通信来往，所以曾被宪兵队传讯过几次。	A-36	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	人の噂では、能島さんは松本さんという左翼学者と以前から親しいので、戦争が苛烈になってからは当局の目を逸らすため町内つきあいに気をつかっている。松本さんはアメリカの大学を卒業し、戦争前にはアメリカ人と文通していたので憲兵隊に何度も呼び出されたことがある。		据传，能岛先生与一个姓松本的左翼学者一直很亲近，所以打战局日趋激烈以来，为了逃避当局耳目，他在与街上人的来往中比较注意。松本先生毕业于美国的大学，战前，和美国人通信来往，所以曾被宪兵队传讯过几次。	A-36	黒い雨(黒雨)
	私はしゃがんでいる両膝の震えが止まらないので、かまわず膝先を風蘭の宿っている岩に押しつけた。		我蹲着的双腿一直不停地发抖，我不顾一切地把膝盖按在长着风兰树的岩石上。	C	黒い雨(黒雨)
	千田町は焼けないで残っていたので私たちは上陸したが、憲兵が非常線を張っていて通行を許さなかった。		千田町没有被烧，还是老样子，所以我们上了岸。可是宪兵设了警戒线，不许通行。	A-36	黒い雨(黒雨)
	字を書くことは重松よりも家内の方が上手である。それに一昨々日から重松は庄吉さんたちと共同で、鯉の稚魚の放養を始めたので、その必要がないのに池の見廻りに行かなくては何となく気がすまない。		在写字方面，老伴要比重松写得好。从大前天起，重松和庄吉等人一起开始放养鲤鱼苗。虽说没有必要，可是，他觉得不到池边转一转，心里就不踏实。	C	黒い雨(黒雨)
	釣をしている間は人間の思考力が一時的に麻痺するので、釣は熟睡と同じように脳細胞の休養になるようだ。		据说钓鱼的时候，人的思维暂时处于麻痹状态，所以钓鱼就如同睡着了一样，使脑细胞得以休息。	C	黒い雨(黒雨)
	堤の内側の斜面に両足を垂らしていたので直ぐには立てなかった。		他的两只脚垂放在堤坝内侧的斜坡上，没法马上站起来。	C	黒い雨(黒雨)
	翌朝、指導員に引率されて現場へ出かけたが、爆音が聞えるので浅二郎さんは仲間の庄吉さんと一緒に橋の下へ逃げこんで、そこに繋いであった苦船のなかに隠れた。		第二天早晨，因为听到爆炸声，指导员率领大家奔赴现场。浅二郎和同伴庄吉一起逃到了桥下，躲进系在那里的带苦莲的船舱里。	A-1	黒い雨(黒雨)
	折から満潮のため、川の水は六尺か七尺ぐらいの深さになっていた。すると間もなく警報解除のサイレンが鳴ったので、浅二郎さんは苦船から出て行って竹筒を揚げ、人目を避けて鰻を取出すため苦のなかに隠れた。庄吉さんも苦のなかに入った。		刚好是涨潮的时候，河水约莫有六、七尺深。可是，没过多久，解除警报的汽笛响了。于是，浅二郎从船舱里出来，提起了竹筒，为了躲着人们取出鳗鱼来，他躲在苦莲里，庄吉也藏进了苦莲里。	A-38	黒い雨(黒雨)
	浅二郎さんの鰻捕りの竹筒は仕掛が一種独特で、長さが六尺ぐらいもあった。その筒がぬらぬらするので庄吉さんが手拭で拭いたり擦ったりしていると、そのとき狐火のような青白い光が閃いて、物凄い爆発音が轟いた。		浅二郎捕捉鳗鱼的竹筒装置是很独特的，长有六尺左右。竹筒很光滑。庄吉正用手巾连接带提，就在这时，闪出一道象鬼火似的白光来，接着发出可怕的爆炸声。	C	黒い雨(黒雨)
	「・・・あの頃なら、黒い雨のことを人に話しても、毒素があることは誰も知らないので、誤解されなんでしょう。・・・」	///“・・・那个时候，即使跟别人说起黑雨，谁也不知道它有毒，所以不会引起误解。・・・”		A-36	黒い雨(黒雨)
	シゲ子が頷いたので、重松はあの空襲の日のことがぐっと胸に来て、ぶりぶりしながら母屋に入った。		繁子点点头。空袭那天的情景，一下子涌上了重松的心头，他难过地走进了正房。	C	黒い雨(黒雨)
	こんな大きな声を出すまでもなく、シゲ子は隣の部屋にいたので、すぐに「被爆日記」を持って来た。		其实没有必要那么大声喊，因为繁子就在隔壁房间里。她很快就将《被爆日记》拿来了。	A-1	黒い雨(黒雨)
	重松はシゲ子が黙ったので、それ見たことかと新規なノートブックを出して来て、「被爆日記」の清書に取りかかった。		因为繁子没有作声，重松以为她同意了，因此他把新式的笔记本拿出来，着手誊写《被爆日记》。	A-85	黒い雨(黒雨)
	ノブラットフォームの側面だと分かったので、肘で人を押しつけて上に這い上った。		原来是站台的侧面。我用胳膊分开人群，爬了上去。	C	黒い雨(黒雨)
	柱だと分かったので夢中で抱きついた。		因为我知道是柱子，就使劲抱住了它。	A-4	黒い雨(黒雨)
	やがて辺りが静かになったので、怖る怖る目をあけてみた。		过不了多久，周围静下来了，我战战兢兢地睁开眼看了看。	C	黒い雨(黒雨)
	柱の周囲には、電線が何十本もぶら下っていた。危険で仕様がなかったと思うので、そこらに雑然と散らばる板ぎれの一つで動かして交叉させてみたがショートする気配はない。		柱子周围悬吊着几十根电线，我觉得很危险，但也没有办法。我从乱七八糟堆在那里的木片中拾起一块来，把电线拨弄得交叉了一下，看来没有必要担心短路。	C	黒い雨(黒雨)
	西洋人のような顔をした通りすがりの老人が、そう云って声をかけて近づいて行こうとした。すると娘はその老人を目掛けて瓦を投げたので、その人はすたすたと逃げて行ってしまった。		一个长相象西方人的过路老人这样招呼着，准备靠近她。可姑娘却朝着老人扔瓦片，老人也就赶紧溜掉了。	B-1	黒い雨(黒雨)
	明治六年なら煙草はまだ専売にされていなかったのだから、百姓は自家栽培して除虫菊のように虫除けにも使ったものだろう。		如果是明治六年，烟叶还不是专卖品，可能是农民自己种好之后，当防虫菊一样用来防虫的。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は顔をぶつけた覚えはなかったの不思議でならなかった。		我并不记得脸碰上了什么，所以觉得非常奇怪。	A-36	黒い雨(黒雨)
	夫人が僕の左の手首を掴んで放さぬので、そっと右手で左の頬を撫でてみた。		夫人抓住我的左手腕不放，所以只好用右手偷偷地摸。	A-36	黒い雨(黒雨)
	僕も駆けたそうとしたが、駆けると頬の筋肉が揺られて左の頬が気になるので、「落ち着いて、落ち着いて」と思いながら歩いて行った。		我正准备跑去，可是刚一跑，腮帮子上的肌肉就晃动，我担心左边的腮帮子，所以边走边想着“沉住气，沉住气”。	A-36	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	水を飲みたくてたまらなかったので、バケツの水を新しくして、三度含嗽してから飲んだ。		我非常想喝水，所以把桶里的水换了，漱了三次口之后，就喝了起来。	A-36	黒い雨(黒雨)
	高橋夫人は全財産を入れた鞆を落したので、おろおろしながら僕について来た。		高桥夫人因为丢了装有全部财产的皮包，惊慌失措地跟在我的身后。	A-1	黒い雨(黒雨)
	がくがくするほど震えるので、高橋夫人もそれに気がついていらした。		因为抖得很厉害，连高桥夫人都发觉了这一点似的。	A-1	黒い雨(黒雨)
	ちょっと離れたところに、踏みつけられた戦闘帽が目についたので、拾って見ると、僕の帽子によく似ているが僕のではない。		我看见在不远的地方，有一顶被人踩过的战斗帽。捡起来一看，很象我的，但不是我那一顶。	C	黒い雨(黒雨)
	夫人がそう云うので、肩にかけていた救急袋から三角巾を出して頬被りのように包んだ。		因为夫人这样说，我随即从挎在肩上的救急袋里，拿出了三角巾，把脸和头一起包起来。	A-1	黒い雨(黒雨)
	それでも足が云うことをきくようになって、気持にゆとりも出来たので東へ向けて線路の上を辿って行った。		这一来，在脚上产生了效果，心情也比较舒畅了。于是我又沿着铁路线向东走去。	A-38	黒い雨(黒雨)
	貨車の真下のあたりは川の水が浅いので、転がり落ちて重なりあっている大量の玉葱が見えた。		货车正下方附近，水很浅，可以看到大量的洋葱滚落下去之后，一起堆在那里。	C	黒い雨(黒雨)
	駆足の構えで忙しく足を動かしながら、人波に探まれるので駆けだすわけに行かず、速歩の足踏する要領で進んでいる男……		一个男子忙着在活动脚，准备朝前跑，但被人群挤住了，跑不起来，只能快速地踏着步子向前走……	C	黒い雨(黒雨)
	好太郎さんのところでは、裏の城山から出る水で溜池をして、そこから笕で水を引いて水甕に入れている。しかも水甕は割目を繋いだ細工が拙いので、服らんだ肩の下あたりで二三箇所の割目から、偶然にも適宜な分量の水が漏れている。		好太郎家的地势，可以把后面的城山流出的水贮在池子里，再用水管把水从池子里引进水缸。粘合水缸裂缝的工艺又很粗糙，在两边鼓起的提手下，还有两三处裂缝，偶尔从那里漏出一些水来。	C	黒い雨(黒雨)
	重松は思い出すことが出来た。あの浅蜷は小粒で肉が透けているように見えたので、このごろは浅蜷まで栄養失調だと、冗談でなしにシグ子に愚痴を云ったのであった。		重松想起来了。那种蛤仔很小，看起来肉好像是透明的，所以矢须子还发牢骚说，近来连蛤仔都营养不良。她这话并不是开玩笑。	A-36	黒い雨(黒雨)
	その翌日は芒種の日に当るので、重松は農家の戸主のお勤めとして百姓道具を整理した。		第二天是芒种，作为一户农家的户主应做的工作，重松整理了农具。	C	黒い雨(黒雨)
	最初の頃の配給米は玄米でございまして、瓶に入れて米搗棒で搗いて白米にしないと食べにくいので、ぶつぶつ不平を云いながら夜勤仕事で瓶搗きしておりました。		最初的时候，配给的米是糙米，如果不把它放进钵子里用舂米棒捣成白米，那就很难下咽，所以人们晚上一边舂米，一边唧唧喳喳地发牢骚。	A-36	黒い雨(黒雨)
	私どものところでは、主人と矢須子さんが勤務先で中食をしておりました。会社へ食事代を支払うだけで現物は持参しないので、一日二食ぶんが浮くようになっておりました。それに私は中食を馬鈴薯ですましておりました。つまり二人の中食と私の中食とで、一日に三食ぶんが伸びていましたので幾らか助かりました。そして一般配給用の生うどんが、ときどき闇で流れるのを入手する道がありましたので、米麦に換算すると一人三合三四勺ぐらいになっていたと思います。		我们家，丈夫和矢须子午饭在工作单位吃，只需向公司交伙食费，不用交实物，所以一天可以省出两顿饭来，而且午饭我只吃土豆。也就是说，他们两个的午饭加上我的午饭，一天可以多出三顿饭来。所以多少还是有些好处，而且一般配给的生面条，经常可以通过黑市的渠道买到，这样换算成米面，一人一天有三合三、四勺左右。	A-36	黒い雨(黒雨)
	私どものところでは、主人と矢須子さんが勤務先で中食をしておりました。会社へ食事代を支払うだけで現物は持参しないので、一日二食ぶんが浮くようになっておりました。それに私は中食を馬鈴薯ですましておりました。つまり二人の中食と私の中食とで、一日に三食ぶんが伸びていましたので幾らか助かりました。そして一般配給用の生うどんが、ときどき闇で流れるのを入手する道がありましたので、米麦に換算すると一人三合三四勺ぐらいになっていたと思います。		我们家，丈夫和矢须子午饭在工作单位吃，只需向公司交伙食费，不用交实物，所以一天可以省出两顿饭来，而且午饭我只吃土豆。也就是说，他们两个的午饭加上我的午饭，一天可以多出三顿饭来。所以多少还是有些好处，而且一般配给的生面条，经常可以通过黑市的渠道买到，这样换算成米面，一人一天有三合三、四勺左右。	A-36	黒い雨(黒雨)
	私どものところでは、主人と矢須子さんが勤務先で中食をしておりました。会社へ食事代を支払うだけで現物は持参しないので、一日二食ぶんが浮くようになっておりました。それに私は中食を馬鈴薯ですましておりました。つまり二人の中食と私の中食とで、一日に三食ぶんが伸びていましたので幾らか助かりました。そして一般配給用の生うどんが、ときどき闇で流れるのを入手する道がありましたので、米麦に換算すると一人三合三四勺ぐらいになっていたと思います。		我们家，丈夫和矢须子午饭在工作单位吃，只需向公司交伙食费，不用交实物，所以一天可以省出两顿饭来，而且午饭我只吃土豆。也就是说，他们两个的午饭加上我的午饭，一天可以多出三顿饭来。所以多少还是有些好处，而且一般配给的生面条，经常可以通过黑市的渠道买到，这样换算成米面，一人一天有三合三、四勺左右。	C	黒い雨(黒雨)
	それからまた、米に大豆を入れたのを配給されることがありました。でも、大豆を混入して飯に炊くと臭みが移って食べにくくなりますので、大豆は選り出して、一合あまり一夜水にひたしませて、翌朝、搗鉢で磨りつぶして木綿布で漉した汁を、味噌汁や醤油汁に入れたりいたしました。		另外还配给过掺有大豆的米。可是，掺着大豆做出的饭有臭味，不好吃。所以只好把大豆选出来，总有一合还多，把这些选出的豆子泡它一个晚上，第二天早上，再用研钵碾碎，用布滤出汁来，放进酱油或酱油汤里。	A-36	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	私のうちでは昭和十六年十二月八日、宣戦布告された日に燐寸と塩をどっさり買いためて置きましたので、終戦になるまで塩と燐寸だけは不足いたしませんでした。	会話文	我们家在一九四一年十二月八日宣战的那一天，买了不少火柴和盐贮备起来了，所以一直到停战，唯独火柴和盐，我们却不缺。	A-36	黒い雨(黒雨)
	甘味品は矢須子さんが会社の同僚から開買いで来るので幾分か助かりました。		甜的调味品是矢须子从公司的同事那里买来的黑市货，倒也帮了不少忙。	B-19	黒い雨(黒雨)
	子供のおやつは、どの家でも九割がた煎大豆でしたが、同じものでは飽きて来るので、そんなとき野草にしておりました。		小孩吃的零食，不管哪一家，百分之九十都是炒豆子，可是老吃这些东西就会腻味，到时就给他们吃些野菜。	C	黒い雨(黒雨)
	虫供養は芒種の次の次の日にする行事である。百姓は野良仕事をするから地の底の虫を踏殺すので、お萩をつくって今は亡き虫類を供養する。		敬虫是芒种后第三天祭祀，农民做农活时踩死地上的虫子，所以要用胡枝子来敬奉现已死去的虫子。	A-36	黒い雨(黒雨)
	好太郎さんは矢須子さんのこといろいろと聞いてつめられ、云いたくないことまで云わされて、くたくたになっていたところだろう。重松はそれと察したので、せんだって鮎を買った礼を云い、お萩を井にあげてもらって、あとは余計な話をせずに帰って来た。		好太郎大概是被女客人追问了不少有关矢须子的事，甚至要他说出他不想说的事来，所以才这样无精打采的吧。重松察觉到这一点，所以只对前几天送来泥鳅表示了谢意，请他把胡枝子倒进大碗里，没有多说话就回家来了。	A-36	黒い雨(黒雨)
	途端に涼しくなった。ところが急に体じゅうの力が抜けて、突いている両手が崩れそうになったので、バケツのふちを抑え両足に力を入れて立ちあがった。		刚一喝倒很凉爽，可是很快全身就没有力气了，撑着身子的双手象要瘫了似的。我按住水桶边，两脚使上劲，才站了起来。	C	黒い雨(黒雨)
	そこへ被服支廠のなかから「おい、まだか。防衛課長に連絡したか」「はい、もう連絡に行きました」という声が洩れ、忙しそうに行ったり来たりする二三人の人影が見えたので、僕はよほど気が楽になった。		这时，从被服分厂传出有人说话的声音：“喂，还没有好吗？和防卫科长联系了吗？”“是，已经去联系了。”有两三个人影在来回走动，看起来很忙。这时，我心里稍稍舒坦一些了。	C	黒い雨(黒雨)
	急いで歩いたので、汗びっしょりになっていたからであるようだ。		据说因为走得急，全身被汗湿透了。	A-1	黒い雨(黒雨)
	かねがね僕は、鞆は人混みのなかでは他人に引っかかるので、避難するときには必ず背負袋ということを云い合せて置いた。		我早就说过：提包在人挤时容易被别人抢走，所以避难时一定要用背包。	A-36	黒い雨(黒雨)
	可なり放心していると思われたので、僕は念のため家を見て来ることにして、「絶対に、この位置を離れてはならぬ。ここで待っておい」と固く云いつけて家に帰った。		我总算放心了。为了慎重起见，我决定到家里去看看。“绝对不能离开这个位置，在这里等着我。”我严肃地吩咐好之后，就回家去了。	C	黒い雨(黒雨)
	僕はその鰯魚臍をしゃぶってみたい誘惑を感じたが、贅沢食品に属するので「口の栄耀のためでなくて、記念のために」と口実をつけて救急袋に入れた。		我馋得真想把就鱼煮了吃。它是一种高级食品，所以我找了这么个借口，说“不是为了满足口福，而是为了纪念”，把它放进了救急袋里。	A-36	黒い雨(黒雨)
	隣組のうち、能島さんと吉村さんの奥さんや宮地さんの奥さんは、姪の矢須子と一緒に古江へ出かけているので無難である筈だ。		我还到后面小巷里看了看邻居的人家，能高先生和吉村先生的夫人、宫地先生的夫人和侄女矢须子一起到古川去了，照说是不会遇难的。	C	黒い雨(黒雨)
	橋爪君は新田さんの親戚の者である。日頃は快活な、はきはとした青年だが、まるで腑抜のようになっている。漠然としたことしか云わないのでよく分らないが、机や椅子の間を潜って屋根と天井の間を抜け、どこからか這い出して来たらしい。		桥爪是新田先生的亲戚，平常是一个朝气蓬勃的青年，可现在完全变得萎靡不振了。他只是说自己糊里糊涂的，什么也不知道；只知道自己好象是从桌子和椅子之间钻过去，再穿过房顶和天花板之间，然后才从什么地方爬出来的。	C	黒い雨(黒雨)
	出征兵見送りの件で新田の小母さんと路上で立ち話をしていると、不意に閃光が煌いて爆風が起り、一枚の瓦が飛んで来て小母さんの頬の肉を削り取ったので、共済病院へ行った。		为了欢送出征士兵的事，她和新田大婶站在路边讲话，没有料到突然一道闪光，狂风大作，飞来一片瓦，削掉了大婶脸上的一块肉，所以到共济医院去了。	A-36	黒い雨(黒雨)
	僕らの予想では、たとい姪の矢須子が古江からトラックで広島へ引返そうとしても、東の方は火の手が速く立ちのぼり、東へ進むにつれて負傷者の数が増しているので千田町に辿りつけないと思う筈がない。		据我们推测，即使侄女矢须子从古江乘卡车返回了広島，随着东边的火焰猛往上蹿，而且越来越向那边蔓延，负伤者的数目也在增多，她就不会想到千田町来。	C	黒い雨(黒雨)
	僕のこの想定に家内は同調して、宇品の通運へ行って待ち受けることにした。しかし矢須子が宇品へ寄るときまっているのではなかったので、一六勝負をしているようなものであった。		老伴很同意我这种推测。所以我们决定到宇品运输分店去等。可是，并不是说矢须子肯定会到宇品来，所以只能说去碰碰运气。	A-36	黒い雨(黒雨)
	水道の水が出ないので、矢須子に泉水で手を洗わせたが汚れは落ちなかった。		因为自来水不出水，所以让矢须子用泉水洗了洗手，但脏东西冲不下来。	A-7	黒い雨(黒雨)
	僕は船に乗せてもらえるので元気が出た。		因为允许我搭便船，精神也就来了。	A-5	黒い雨(黒雨)
	僕は能島さんが足ばやに歩くので、咽は渴くし足は痛いし、どうにもついて行けなくなった。		能岛先生脚步迈得快，我为了跟上他，累得喉咙发干，脚又痛，最后终于跟不上了。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は咽がひりひり痛むので、リュックサックから瓶を取り出して水をラップ飲みにした。		我感到喉咙阵阵作痛，就从帆布包里拿出水瓶来，嘴对着瓶口喝开了。	B=1	黒い雨(黒雨)
	校庭に入っていくと、防火用水のタンクに水があったので、タオルを湿して煙が吹きつけて来ると鼻や口を覆うことにした。		我们走进学校院子里，防火用的管道里有水，我把毛巾弄湿，准备在烟雾扑来时，好捂住鼻子和嘴。	C	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	風が次第に落ちて来て、煙が動かなくなったので、だんだんに息苦しくなってきた。		风渐渐小了，烟雾不动了，而我却慢慢地喘不上气来了。	C	黒い雨(黒雨)
	この熱気のなかに妻と姪を連れこんだのは、無謀かも知れなかった。逃げだせる確信はなかったが、ときどき向うから歩いて来る人もあったので、向うへ行きつけるだろうと半ば自信が持てた。		把妻子和侄女带到这热气腾腾的地方来，也许是失策，我也失去了逃出去的信心。可是经常有人从对面走来，又使我保有一半信心：	B-5	黒い雨(黒雨)
	鷹野橋まで辿りつくと、そこから北東一帯は早く焼けたので煙が薄らいでいた。双葉の山が右手にぼんやり見えた。		好不容易到了鷹野桥。从那里往东北的一带已经燃烧过了，所以烟雾稀薄，隐约可以看到右边的双叶山。	A-36	黒い雨(黒雨)
	「二人とも目が血走って、血を噴いたように真赤になっている。しかし休むことは出来ないのだから先に立って歩いて行った。」		“他们两个的眼睛都充血着，红得像要喷出血来似的。可是，现在还不能休息，所以我站起来先走。”	A-36	黒い雨(黒雨)
	右に曲ろうとしてみたが、ぱっと熱気が五体を打つので引きさがつた。		好不容易才到了纸屋町的火车站。因为这里是电车的交叉点，折断了的高往右拐了拐，突然一股热气扑向我的全身，只好退了回来。	B-9	黒い雨(黒雨)
	架線はそこかしこ断たれているから電流が来ている筈はないのだが、線が交叉接触しているのだから電気の怪しさを發揮しそうに思われる。		高架线到处都折断了，按理是不带电的，但线交叉在一起，总使人觉得它会产生出什么怪现象来似的。	B-5	黒い雨(黒雨)
	僕は目が痛くなったので、目蓋の上から指でマッサージをしながら歩いた。・・・僕は頭に血が上がりすぎて目が痛むのだろうと思ったので、子供のとき鼻血が出たときにする治療を矢張り子にしてみました。		我边走边用手指按摩眼皮，感到眼睛丝丝拉拉地胀痛。我想可能是头部冲血眼睛才痛的吧，所以让矢须子照我小时候治流鼻血的方法给我治了治。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は目が痛くなったので、目蓋の上から指でマッサージをしながら歩いた。・・・僕は頭に血が上がりすぎて目が痛むのだろうと思ったので、子供のとき鼻血が出たときにする治療を矢張り子にしてみました。		我边走边用手指按摩眼皮，感到眼睛丝丝拉拉地胀痛。我想可能是头部冲血眼睛才痛的吧，所以让矢须子照我小时候治流鼻血的方法给我治了治。	A-36	黒い雨(黒雨)
	今日の佐藤さんの話では、最近に及んで敵の攻勢が激しくなったので、日本は本土決戦にそなえ、もし本土が敵軍のために分断されても各地方で独立して戦闘が進行できるように、地方総監府という地方政府がつけられていた。		据今天佐藤说，最近敌人的进攻加剧了，所以日本在作本土决战的准备。如果本土被敌军分割开来，各地也要能继续进行独立作战，这才成立了地方总监府这样一种地方政府。	A-36	黒い雨(黒雨)
	奥さんは遠方に暮らされていた。すると総監が「わたしはもう覚悟が出来ておるから、あんた一人で早く逃げなさい」と再三云われ、火がもう近くまで迫っていたので奥さんは止むなく逃げ行かれたそう。		夫人也毫无办法。据说总监再三说：“我已经有思想准备，你一个人快跑吧！”由于火势已经迫在眉睫，夫人只好一个人跑了。	B-9	黒い雨(黒雨)
	近づいて見ると、三歳くらいの女の児が、死体のワンピースの胸を開いて乳房をいじっている。僕らが近寄るので、両の乳をしっかりと握り、僕らの方を見て不安そうな顔つきをした。		走近一看，一个三岁左右的小女孩正在打开尸体的连衣裙上身，摆弄她的奶头，见我们靠过去，她就紧紧抓住两个奶头，眼睛看着我们，脸上显得很害怕似的。	C	黒い雨(黒雨)
	靴の水が少なくなったので歩き易くなったと思うと、靴に砂が入ってびっこを引くほど痛くなる。		我刚觉得鞋里的水少了一点，好走些了，沙子又钻进鞋子里，痛得我只能瘸着腿走路。	C	黒い雨(黒雨)
	水のなかを歩く方が却って増しなので、ざぶざぶと水のなかを歩いて行った。		在水里走反而好得多，所以我们就哗哗啦啦地■着水走。	A-36	黒い雨(黒雨)
	街から吹きつける煙が次第に少なくなって、右手が田圃になったので、崩れかかった石崖を足がかりに岸にの		从街上吹过来的烟逐渐少了，右边是田地，所以我们利用崩潰了的石崖当台阶，上了岸。	A-36	黒い雨(黒雨)
	やと涼しい葉蔭に辿りつけたので、僕は口もきかないで坐りこんだ。		好不容易走到了凉爽的竹荫下，所以我们谁也没有说话，就一屁股坐了下来。	A-36	黒い雨(黒雨)
	熱と光がバケツの内側で反射してその量を増したので、胡瓜を変色させたのだろうか。		由于热和光从水桶的内侧反射过来，增加它的热量，所以才使黄瓜变色的吗？	A-18	黒い雨(黒雨)
「・・・家が焼けて来るので、蒲団の覆いに包んで背負って逃げました。・・・」		房子快烧着了，所以就用被单包起来，背着就往外跑，・・・		A-36	黒い雨(黒雨)
「・・・ところが、今度は電車が順調に動き出したので、がらがらと響く音の方が大きくて演説はそれきりで終わった。」		“・・・可是，接着电车却很顺利地开动了，咯咯咯咯的，响声特别大，讲演也就到此结束了。”		C	黒い雨(黒雨)
	おかげで車内に少し余地が出来たので、順送りに僕はデッキのところから半ば車内に身を入れた。		幸亏他们下车，车里稍微松了一些，大家这才顺着往里边走，我也从车门口的踏板上挤进了半个身子。	B-15	黒い雨(黒雨)
	人込みのなかを分けて出る人もいた。これで可なりゆとりが出来たので、今まで黙りこんでいた乗客たちは、ぼつりぼつりお互い口をきくようになった。		///也有挤开人群下车的。这下子可空多了，所以一直没有吭声的乘客，也开始你一言我一语地说起话来来了。	A-36	黒い雨(黒雨)
	手足を動かしてみると動くので、殆ど手さぐりで家の表口の方へ出て行った。		他动了动手和脚，还能动，所以几乎是摸到自己家的大门口去的。	A-36	黒い雨(黒雨)
	///しかし娘の身が気にかかるので駆け出して行くと、福島橋の手前で向うから駆けて来るで田さんという人に遭った。		///他惦念着女儿，所以要跑去看看，在福島桥这边碰上从对面跑过来的与田。	A-36	黒い雨(黒雨)
	「あかん、あかん、退却じゃ」と与田さんが手を引張るので、何もかもうっちゃって一緒に己斐町の方へ逃げて行った。		“不行，不行，撤退！”与田拽住了他的手，只好随着与田一起往己斐町方向逃去。	B-9	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	この少年は火の玉が閃いたときには家のなかにいた。ぱっと光を感じ、ごうっとうと云う音がしたので外に飛び出そうとした。		在火球闪光时,这个少年正在家里,他感到啪地亮了一下,又是轰的一声响,他准备往外跑。	C	黒い雨(黒雨)
	少年はがっかりして材木と材木の間に身を沈めたが、足首の束縛を不意に感じなくなったので材木と材木の間から這って出た。		少年感到很丧气,他把身子缩到木材和木材之间,没想到脚脖子反面没有什么束缚了,这才从木材和木材之间爬出来。	B-15	黒い雨(黒雨)
	去年、榴榴は塀のこちら側のぞいている枝に三つか四つか実をつけた。それが青いうちにみんな落ちたので、子供は今年こそ無事に青つように声援を送ったのだ。		去年,从墙这边看得见的树枝上结了三、四个石榴,可都在不熟的时候就掉下来了,孩子是祝愿它今年可要好好地产长。	C	黒い雨(黒雨)
	僕はタオルをしぼって体を拭いたが、洗面器の水を何回取換えても黒く濁るので、いい加減に止して上から下まで替換えた。		我把毛巾拧干,擦了擦身子,洗脸盆的水换了几次还是脏的,只好马马虎虎算了。然后从上到下换了衣服。	B-9	黒い雨(黒雨)
	炊事室をのぞいて見ると、吹き飛んだ回転窓から湯気が外へ流れるので、いつものように蒸気がもやもや立ちこめていない。		看了一下伙房,蒸气从被刮掉的转动窗口往外流,不象平日那样热气腾腾而不消散。	C	黒い雨(黒雨)
	とにかく中腰に立つことが出来たので、窓枠に片手をかけ、片手で腰を抑え、やっと立ちあがった。		好歹还能直起腰来,一手扶着窗框,一手按着腰,总算站起来了。	C	黒い雨(黒雨)
	この古市町と広島市では、戸籍その他について互に役所の管轄が違うので、平時でも手続をすませるまでにはかなりの時間を食う。・・・我々が勝手なことは出来ないで、充分調査して来るように、工場長は庶務課の者を町へ使いに出した。		这个古市町和広島市,在户籍等各个方面,管辖的机关互不一致,因此,就是平时,办好一个手续也要费很多时间。・・・我们不敢草率,所以厂长打发庶务科的人去好好调查了一下。	A-37	黒い雨(黒雨)
	この古市町と広島市では、戸籍その他について互に役所の管轄が違うので、平時でも手続をすませるまでにはかなりの時間を食う。・・・我々が勝手なことは出来ないで、充分調査して来るように、工場長は庶務課の者を町へ使いに出した。		这个古市町和広島市,在户籍等各个方面,管辖的机关互不一致,因此,就是平时,办好一个手续也要费很多时间。・・・我们不敢草率,所以厂长打发庶务科的人去好好调查了一下。	A-36	黒い雨(黒雨)
	「・・・僕は一度に顔が火照るのを覚え、そこに居たまれなくなったので、みんなの間を通りぬけて事務室に帰った。	「・・・我感到脸上火辣辣的,可不能待在这里。所以我从人群中穿过去,回到了办公室。		A-36	黒い雨(黒雨)
	工場長は野辺送りした僕の報告を聞くと、在木カネの介抱していた充田タカという被爆者が死んだので、僕に葬式のお経を読めと云った。		厂长听我报告了送葬的情况之后,因为在木金护理的一个被炸者充田高死了,所以又要我在葬礼上念念经。	A-7	黒い雨(黒雨)
	僕の体は汗でべとべととしていたが、もう葬式の支度が出来ていると聞いたので、工具の背広を借着して寮の広間へ行っった。		我身上出了汗,粘糊糊的,因为说葬礼已准备好了,所以借了职工的西服,就往宿舍的大厅去了。	A-7	黒い雨(黒雨)
	傷を受けて以来、ちっとも痛みを感じないので、布を当てがって置いたままにしていたが、汗拭きを兼ねて今日は手当をしようと、救急袋を取って来て洗面所の鏡に向った。		受伤以来,一点都不感到痛,所以一直贴着布,没有动过。今天我想擦擦汗,同时换换药,所以拿来了救急包,对着洗脸室的镜子照了照。	A-36	黒い雨(黒雨)
	燃れた皮膚の一端を爪先で摘まみ、そっと引張ると少し痛いので、自分の顔ではあるなと思った。		我用手指尖掐住皱起来的皮的一端轻轻地一撕,感到有一点痛,这才知道原来是自己的脸啊!	B-15	黒い雨(黒雨)
	正午に近づいていた。食事をしに借間の我家に帰ったが、坂を登るとき足の痛みがひどいので、拔足差足のような恰好で足を運んだ。		将近中午,我回到租用的房间去吃饭。走到坡路上时,脚痛得很厉害,所以只好踩着脚往前走。	C	黒い雨(黒雨)
	六日の朝、警戒警報が解除になったのに爆音が聞えるので、台所の窓からのぞいて空を見た。		六日早晨,警戒警报解除了,可是却听到有爆炸声,她就从厨房的窗口往外看了看天空。	B-1	黒い雨(黒雨)
	仕方がないので他の始末に取りかかった。		没有办法,只好去收拾其他东西。	B-9	黒い雨(黒雨)
	昨日は避難者救援の手伝い仕事もあったのに、今日からは何もすることがなくなったので、みっともなくして食事を貰いに行けないと云う。		昨天还帮忙搞救援避难人员的工作,可今天开始就没什么可做了,这多不象话,所以不能去打饭。	C	黒い雨(黒雨)
	理由を聞くと、師団参謀から電話があって、広島がいつ空襲されるか知れない情勢になったので、保管軍用品を即時疎開させよと命令があった。		我问了存放的理由,他说是师里参谋来电话,厂里不知什么时候会遭到空袭,所以命令把保管的军用品马上疏散开来。	A-36	黒い雨(黒雨)
	緊急を要することでもあるし、疎開させるところがなく困った挙句、電話で野津大尉に通信隊の状況を聞いたので、僕を訪ねて来たと言った。僕は会社へ問い合わせたからまた引受けたが、量が多くて全部の保管は出来ないで、そのうちの一部の炊入りの米は、田内という畳屋へ僕から依頼して預かってもらった。		因为要求急,又没有疏散的地方,后来打电话给野津上尉,了解到通讯部队寄存粮食的情况,所以特意来拜访我的。我和厂里商量之后,答应了他的要求。因为数量多,不可能全部保管,所以把其中一部分草袋装的米,由我负责寄存在一个叫内田的人的草席铺里。	A-36	黒い雨(黒雨)
	緊急を要することでもあるし、疎開させるところがなく困った挙句、電話で野津大尉に通信隊の状況を聞いたので、僕を訪ねて来たと言った。僕は会社へ問い合わせたからまた引受けたが、量が多くて全部の保管は出来ないで、そのうちの一部の炊入りの米は、田内という畳屋へ僕から依頼して預かってもらった。		因为要求急,又没有疏散的地方,后来打电话给野津上尉,了解到通讯部队寄存粮食的情况,所以特意来拜访我的。我和厂里商量之后,答应了他的要求。因为数量多,不可能全部保管,所以把其中一部分草袋装的米,由我负责寄存在一个叫内田的人的草席铺里。	A-36	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	倅は二人とも英霊になったので合葬し、名前を二つ並べて刻んだ大きな墓を立てているようだ。		他两个儿子都已经阵亡了，合葬在一起，坟前还立着一块刻着两个名字的大墓碑。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は野津大尉と知りあいだと云ったので、その軍人は「やあ、どうも御苦労でした」と云って封筒の中身を読みかけた。		因为我认识野津上尉，这位军人说了声：“啊！您辛苦了。”就抽出情况报告来看。	A-1	黒い雨(黒雨)
	取りつく島もなかったので、僕は階下へ引返して工場長に報告した。		因为实在没有办法，我只好下楼来报告厂长。	A-81	黒い雨(黒雨)
	シゲ子も矢須子もまだ川から帰って来ていなかったの、夕方まで眠ることにして、蠅を防ぐため蚊帳を吊って寝た。		繁子和矢须子到河里去洗衣服还没回来。我决定在天黑以前先休息一下，为了防止苍蝇(滋扰)，放下蚊帐睡了。	C	黒い雨(黒雨)
	すこし眠れたが、フクロウの鳴く声が聞えたので目がさめた。		睡了不大一会，猫头鹰的叫声把我吵醒了。	C	黒い雨(黒雨)
	天守閣は何千トンの重さがあったか知れないが、地球の引力よりも強い力で動かされたので、そのままの姿で空中を飛んだのだろう。		不知道天守阁有几千吨重，可是炸弹爆炸的力量也许超过了地球对它的吸引力，所以才把它原样不变地刮到天空中去。	A-83	黒い雨(黒雨)
	///連れの一人が半ば失神して、よろめきながら歩くので、市外祇園町の知りあいのうち午後四時半ごろ辿りついた。		由于跟着他的一名队员，已经处于昏迷状态，走路踉踉跄跄，所以到下午四点半，才好不容易走到市郊祇园町的一位熟人的家里。	A-36	黒い雨(黒雨)
	三次町の場合は、山を隔てているので広島市のクラゲ雲は見えなかったろう。三原市は広島市から三十里だが、西の山が低いので見えたそうだ——後日記)		由于三次町和广岛市中间隔着山，也许就没有看到蘑菇云。三原市和广岛市虽然相距一百多公里，可是因为西面的山低，据说看到了蘑菇云——(日后补记。)	A-15	黒い雨(黒雨)
	三次町の場合は、山を隔てているので広島市のクラゲ雲は見えなかったろう。三原市は広島市から三十里だが、西の山が低いので見えたそうだ——後日記)		由于三次町和广岛市中间隔着山，也许就没有看到蘑菇云。三原市和广岛市虽然相距一百多公里，可是因为西面的山低，据说看到了蘑菇云——(日后补记。)	A-1	黒い雨(黒雨)
	工兵隊はピカドンで死人を無数に出したので、白島から流れて来る川の洲に死体を井桁型に積み重ねて火をかけている。		他说，因为工兵队被炸死者不计其数，所以尸体都堆积在从白岛流过来的那条河流的河滩上，堆成井字形，点火焚烧。	A-7	黒い雨(黒雨)
	眼球にもどつさりたかっている。蛆が動きまわるので、目蓋が動いているように見えるのだ。		在眼球里面也有成堆的蛆虫在爬动，所以看起来好像眼皮动弹一样。	A-36	黒い雨(黒雨)
	石炭のことは統制会社の管轄に属するので、市役所で容喙すると、やがてその結果は軍からお叱りを受けるだけである。		因为煤炭属于专卖公司管理，市政府一插手，就会受到军方的申斥，如果把事情弄僵了，反而会招来更坏的结果。	A-1	黒い雨(黒雨)
	後入りの若い奥さんと幼いお嬢さんが、倒れた家の下敷になったので、火をかぶって死んだことは確かだが、この歳だから焼跡を掘る元気もないようだ。		现在已经证实，他那年轻的续弦夫人和幼女，都压在坍塌的房子下面，葬身在火海里了。象他这样大的年纪，已经没有力气挖掘废墟，寻找遗骨了。	C	黒い雨(黒雨)
	栗屋市長のお宅は水主町にあったので無論全焼した。		因为栗屋市长的住宅坐落在水主町，当然全部烧光了。	A-63	黒い雨(黒雨)
	どうにも仕方がないので、我々は管理部長に面会を求めて話したが、やはりぬらりくらりで結論は出なかった。		我们实在没法，所以又找管理部长进行交涉，可他也是东拉西扯，得不出一个结论来。	A-36	黒い雨(黒雨)
	阿呆らしくなったので、僕は田代さんをそこへ残して帰って来た。		因为田代先生象呆了似的一直愣着，我就把他留在那里，自己回来了。	A-4	黒い雨(黒雨)
	とても正規な配給では食糧も日用品も足りないの、こちらは足を播粉木にして諸所方々を探しまわり、被服支廠の威光を笠にきて仕入れて来る。		因为按规定分配的粮食和日用品，少得可怜，所以我们就四处奔走打听，靠着被服支厂的权势，到处采购东西；	A-7	黒い雨(黒雨)
	弁当を持って徒歩で通ったので、旭町と翠町の境の稲田や蓮田には馴染がある。		因为每天带着饭盒步行上班，所以对旭町到翠町之间的大片稻田和藕田都非常熟悉。	A-7	黒い雨(黒雨)
	(雑語だけはリュックサックのなかに残して置いた) これらは僕の会社の工場長から石炭統制会社の人たちへ慰問品として託されて来たもので、その人たちの行方が知れないので持って行き場のなくなった品物である。		这些东西本是我们厂长托我带给煤炭专卖公司的职员们的慰问品。可是，因为不知道专卖公司的职员都到哪里去了，所以这些东西也就没地方送了。	A-7	黒い雨(黒雨)
	蚊の襲来がひどいので、日が暮れるのを待ちかねることがあるようだ。		因为蚊子很凶，有的人忍着，等到天黑才去。	A-1	黒い雨(黒雨)
	中尾さんはユーカリの葉を頻りに嗅いでいた。工場長はこの常緑植物の葉を草取籠にぎざしり詰込んで僕に持たせたので、白っぽい粉の吹いている楕円形の若葉は、くたくたに萎れていた。半月形の子葉は固苦しく折れまがっていた。		中尾君一次又一次地闻着桉树叶。是厂长把满满的一篮子常绿桉树叶装好之后，让我拿来的。原来都是带白粉的椭圆形的嫩叶子，现在已经枯萎变软，卷曲成半月形的老叶子了。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は人夫の云うのに従って、その輪を右肩から左の腋下にまわして掛け、細引の結び目が背中まんなかに行くようにした。これで広い範囲でもって、がくんがくんを受けとめるので少し具合がよくなった。		我按着车夫所说的，把绳头上的圈从右肩上斜斜拉到左腋下，让拉绳的绳头处在背的中间部位，这样一来，由于在很宽的范围内承受拉绳力量，情况就稍有好转了。	A-78	黒い雨(黒雨)
	僕らは少し進んでは汗を拭き、少し進んでは汗を拭き、そのつど水を飲んだので、街から出て行く前に二瓶の水が無くなった。		我们稍微向前走一段，就得擦擦汗，再稍走一段，又得擦擦汗，每次擦汗的时候，就得喝几口水，所以还没走出这条街，两瓶水就喝光了。	A-36	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	出発。そして、約五キロというあたりに来ると、市内と違って路面に瓦のかけらが無くなったので、がくんががくんが来なくなって助かった。やっと仮寓に辿りついたときには電気がついていて、やれーと休みど、縁側に腰を卸そうとして驚いた。電燈の明りの下に、思いもよらぬ義兄が二人、大の字に寝て軒をかいていた。		又出发了。大约走到有五公里的地方，就和市内显然不同了，道路上没有破碎碎瓦，车子也显得轻快多了，拉着也不那么费力气了。在点灯的时刻，好不容易地回到了我的临时住处。刚想在房檐下坐下来休息休息，不觉使我大吃一惊。在明亮的电灯下，想不到我的两位内兄，象“大”字一样躺在那里，打开了呼噜。	C	黒い雨(黒雨)
	そのときサキは蓮芋畑のなかの草むしりをしていて、手拭を姐さん被りにしてしゃがんでいたの、芋の広葉が閃光を遮ってくれた。即死は免れたが、腰が抜けたのかもしれない。		当时她在藕田里拔草，因为头上象大嫂子似的包了一条手巾，荷叶又遮住了闪光，虽然当场幸免一死，但腰部可能受了伤。	A-1	黒い雨(黒雨)
	火傷の手当には塗薬を与え、猛烈な苦痛を訴える患者にはパントポンの注射をしていたが、博士はパントポンのアンブルをターゲットしか確保していなかったの、何人もの患者だから一日で薬品不足になってしまった。		对因剧烈疼痛而大吵大嚷的病人，就给他打一针止痛剂。可是，博士只有一打止痛注射剂，因为病人太多，药只用了一天就不够了。	C	黒い雨(黒雨)
	渡辺がそう思いめぐらしていたところ、十日の朝、親戚の者が申しあわせたように五人前後して集ったので、みんなで相談して取敢ず渡辺と高丸が総代で広島へ来ることになったと云う。		渡辺正在考虑这个问题的时候，十日早晨，五、六个亲戚凑在一起商量，最后决定要渡辺和高丸作代表到广岛来。	C	黒い雨(黒雨)
	昔は九州中津藩の飛領地で代官所があったので武家屋敷も残っているが、現在では衰微の一途を辿るだけで交通の便にも欠けている。		很久以前，这里是中建藩的一块飞地。因为当时这里有藩主的衙门，所以至今还保存着那时武士的住宅。现在，这里却是每况愈下，交通很不方便。	A-7	黒い雨(黒雨)
	渡辺と高丸は蘆田川の渓流に沿う坂道を二時間あまり歩いて下り、魚淵淵というところまで行くと木炭動力の空きトラックが来たので、頼んで便乗させてもらった。福山市の焼跡へ着いたのは夜の十時すぎであった。		渡辺和高丸，沿着芦田川走了两个多小时的下坡路，来到一个叫鱼渊的地方，看见开来一辆烧木炭的空卡车。经过交涉，才得顺路搭车，晚上十点多，到了福山市的废墟。	C	黒い雨(黒雨)
	切符を売ってもらおうとしたが、なかなか駅員に会えないので、暗がりのなかで知らない男と暫く立ちばなしをした。		本想买两张火车票，可怎么也找不到车站的工作人员，于是在黑暗中和一位素不相识的人站在那里说了一会话。	A-38	黒い雨(黒雨)
	頭を下げると、ずしりとリュックサックが首や頭を押し、背中を水平にして這って行くと脇腹が膝の下へ廻る。そのつど平衡を失って体が揺れるので、はっとばかりにレールをしっかりと握る。		要是一低头，背囊就会滑下来压在头和脖子上；如果背部保持水平状态，一向前爬，背囊又会从背上滑到腋下或侧腹部。每当出现这种情况时，身体就会失去平衡，摇晃起来。身体一摇晃，就吓得死死地抱住铁轨。	B-1	黒い雨(黒雨)
	その瓶が無残のまま焼土の上に立って、青いケンボナシの実があったので、シゲ子は不思議に思ってたという。		那个瓶子完好地放在焦土上，还有青色的玄圃梨。繁子看了以后，总觉得有些不可理解。	C	黒い雨(黒雨)
	僕は明日の朝が早いので、客人に失礼して隣の三畳間で寝床についた。		因为我明天早晨还得早起，就先向客人告别，到隔壁三铺席的房间里睡觉去了。	A-4	黒い雨(黒雨)
	お袋も松の木の根を掘りに山へ出かけるので、よぼよぼの身で手に豆をこしらえているなどと話していた。		我娘也摇晃着年迈的身躯，上山去刨松树根，手上还磨起了水泡。	C	黒い雨(黒雨)
	「てんで鍵が、廻らんです。廻らんの、裏から整つとるんですわ」		“锁根本转不动。正因为转不动，才想从背面砸开它呢！”	A-48	黒い雨(黒雨)
	ヘルメット帽にたかろうとする夥しい人蜂は、たかり損ねて乱舞の踵をつづけていた。この男は泥棒ではなさそうに見えたので、僕は「お邪魔しました」と云ってその場を去った。		钢盔上聚集着一片嗡嗡乱飞的苍蝇。我看这个人不象是个小偷，说了句：“打扰您了！”就离开了。	C	黒い雨(黒雨)
	///小島村から油木町、上下町までは汽車がないので木炭トラックで行き、上下町からこちらは矢賀町まで汽車に乗せられて来た。		///从小島村到油木町和上下町，因为没有火车，是坐烧木炭的卡车去的，从上下町到矢贺町是坐的火车。	A-1	黒い雨(黒雨)
	僕には工場の門限が適用しないので、今日はこの人たちと行動を共にするのが当然だという気持になっていた。		因为工厂大门的进出对我不加限制，所以，今天我和他们共同行动，感到是理所当然的。	A-7	黒い雨(黒雨)
	曹長がその電車の残骸の方へ歩いて行ったので、僕も恐る恐る近づいて行った。		因为班长朝着电车残骸走去，我也就提心吊胆跟着走过去。	A-4	黒い雨(黒雨)
	重態などの切られ与三郎のようなものである。それきり足腰たなくなつたので、病室のベッドに臥たきりてこの病院の緊急運営に当たっている。		严重的时候，就象满脸伤痕的与三郎一样。自那之后，他的腿和腰不能站立，只好躺在病床上，继续管理这个医院的紧急营业。	B-9	黒い雨(黒雨)
	被爆者たちの症状は院長の症状と同じように、食欲がなくて、嘔吐、下痢、血便の出るものが多いので、今度の新型爆弾には毒瓦斯または赤痢菌が入っていたものと院長は判断した。		医院里好些被炸者的症状和院长的症状相同，如食欲不振、呕吐、腹泻、便血等，所以院长判断这次扔下来的炸弹中，加进了毒瓦斯和赤痢菌。	A-36	黒い雨(黒雨)
	待たされすぎのような気がしたので、まだかと思つて玄関に入って行くと、小窓のなかの台に載せてある燈火用の皿が目についた。		由于等的时间太长了。我心想是不是还得继续等下去呢？于是就站起来走进大门去。我看见在一个小窗子里面的窗台上，摆着一个当灯用的小盘子。	A-15	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	その前々日、八日に、どこかの兵隊が来て病院の薬品や繻帯をゴッソリ持って行ったので、大阪から来た救護班は地獄に仏だと一人の看護婦が云ったそうだ。		因为前几天,可能是八日那天吧,不知从哪里来的士兵,把医院的药品、绷带全都拿走了。所以一个护士说,从大阪来的救护班,才是地狱里的活佛呢!	A-7	黒い雨(黒雨)
	昼間は家にいないので、救護班のものはその顔を減多に見ることがない。		因为白天不在家,所以救护班的人很难见到他。	A-7	黒い雨(黒雨)
	ともかく、甲神部隊の罹災人名簿整理の一助ともなるかと思ひ、ついでもあるので連絡すると云って来たそうだ。		不过,他们心想,反正对整理甲神部队遇难者名单有好处,所以才顺便和这时联系一下。	A-83	黒い雨(黒雨)
	間もなく亭主が亡くなったので、亭主の弟夫婦に家督を譲って倉敷の旅館へ女中奉公に行った。		因为婚后不久,丈夫就死了,于是,把户主的权利转让给丈夫的弟弟和弟媳妇,自己到仓敷旅馆当女佣人去了。	A-61	黒い雨(黒雨)
	今年の正月休みのときには、痔が痛むので加々美旅館に一泊した。		今年新年放假的时候,因为痔疮痛,我曾在加加美旅馆住了一夜。	A-1	黒い雨(黒雨)
	山本駅で電車を待たされたので、乗車したときにはすっかり日が暮れていた。		因为在山本车站等电车,所以上车的时候,天已经完全黑了。	A-7	黒い雨(黒雨)
	テイ子さんは僕の寓居へ寄るのは遠慮すると云ったので、古市駅から別れて来た。		由于贞子客气地说想不到我临时住所来,所以就她在古市车站分了手。	A-18	黒い雨(黒雨)
	シゲ子や矢須子は勿論のこと、僕も三里とはどこか正確なことを知らないので、シゲ子が家主の隠居さんに聞いて来て、		不用说繁子和矢须子,就连我也不知道三里准确的在哪里。因此,繁子又到退休在家的老房东那里去打听。她回来就说:	A-37	黒い雨(黒雨)
	/当時、まだバスが通っていなかったので、先ず小島村に来て、友成虎雄さんの案内で山道を歩いて高蓋村から上下町に行った。		///当时,公共汽车还没有通行,所以她先到了小■村,在友成虎雄的带领下,从高盖村走山路来到上下町。	A-36	黒い雨(黒雨)
	聞くところによると、戸坂村の国民学校には数千人の罹災者が送られて、収容しきれないので、学校の庭ばかりでなく村の農家の庭も仮収容所になっていた——(後日記)		但是听说户坂村的国民学校,收容的伤员就有几千个人。因为收容不下,不仅学校的校园,就连农民家的院子都变成了临时收容所——(日后补记)。	A-1	黒い雨(黒雨)
	次は消防団長が訓辞に立つ順序だが、団長の家は役場から遠く、燈火管制で提燈の明りを遠慮しなくてははけないので連絡がつかなかった。		接下去,应该由消防团团长训话,但因为团长的家离村公所较远,由于灯火管制,晚上不准打灯笼,所以没有联系上。	A-7	黒い雨(黒雨)
	自動車のライトは覆いをして、僅か三メートルか四メートル先が見える程度にしていたので、見送る者と送られる者は互に顔が分らない。		由于卡车的前照灯被遮盖起来,只能看到车前三、四米远的地方,所以送行的人和被送的人谁也分不清是谁。	A-36	黒い雨(黒雨)
	以上、僕は今ではもう原爆の怖しさについて、口をつぐんでいる必要がなくなったので、保健婦たちのお灸のまじないも偽りない実状として書きとめた。		鉴于以上这些情况,我已经没有必要再闭口不谈原子弹的可怕了。至于女保健员把灸治作为护身符一事,是作为事实记录在案的。	C	黒い雨(黒雨)
	「それに庄吉さんたちと共同で、鯉の養魚池を整備する急ぎの仕事が出来たので、当分のあいだ日課として庄吉さんのうちの崖下へ出かけることにした。		而且又急于要和庄吉一起赶修鲤鱼放养池,只好把养鱼的事作为当前的任务。于是,他决定到庄吉家的山崖下面去。	B-9	黒い雨(黒雨)
	そこで雌雄は、やっと会合したところで気分がいい新しい水に浸るので、たちまち刺激されて、夜の十一時すぎから明方までに産卵の支度に取りかかる。		这样一来,雌雄鲤鱼好容易汇合在一起,又泡在舒适的新水里,很快兴奋起来,从夜里十一点多到拂晓就会开始产卵。	C	黒い雨(黒雨)
「矢須子さんは、初めに熱が出たんで」と、シゲ子は囁いた。「家庭療法の本を見て、アスピリンを飲んだんだよ。それでも熱が下らなかったので、本を頼りにサントニンを飲んだんだよ」		“开始的时候,矢须子身上发烧。”繁子小声地说,“她看了家庭疗法的书之后,就吃阿司匹林,可是烧并没有退,所以又根据书上写的,吃了山道年。”		A-86	黒い雨(黒雨)
	重松はそんな遠大な理想よりも、矢須子の病気のことが気になるので、		比起这个机构的远大理想来,重松更关心矢须子的病,所以他岔开医生的话说:	A-36	黒い雨(黒雨)
	あっさり承知してくれたので、重松は近日中にお伺いしますと云って帰って来た。		因为他很爽快地答应下来,所以重松说,过几天再来拜访,说完就回来了。	A-1	黒い雨(黒雨)
「今朝、石見の郷里から電話がありました。親父が中気で倒れたと知らせがありましたので、明日の朝早く発ちます。・・・」		///“今天早上,石见老家来了电话,说是父亲中风,病倒了,我明天一早要走。・・・”		C	黒い雨(黒雨)
	夜、むしむしするので、矢須子さんも一緒にみんなケンボナシの根方に涼台を出して涼む。		晚上很闷热,所以矢须子也搬出凉床来,和大家一起在玄圃梨树下乘凉。	A-36	黒い雨(黒雨)
	もっともらしく話すので矢須子さんがよく笑う。爺さんは決して笑わない。それが可笑しさを倍にする。		因为他讲得逼真,矢须子常常笑起来。老爷爷却不笑,这样,反而使人感到更好笑。	A-1	黒い雨(黒雨)
	送ろうとしたが、附添不要だと強く拒むので諦める。		我本想送她去,她坚持不要,只好作罢。	B-9	黒い雨(黒雨)
	廊下で九一色先生に逢ったので立ち話をする。		在走廊上碰上了九一色医生,站着说了说话。	C	黒い雨(黒雨)
	矢須子さんは疲れているようだし、昼飯を知らせるベルが鳴ったので、それを汐に帰ることにする。		因为矢须子好象很累,而且吃午饭的铃响了,我就趁此机会往回走。	A-4	黒い雨(黒雨)
	看護疲れのためシゲ子が立ちくらみするようになったので、入院中の矢須子には附添婦を附けて、重松が奇数の日に病院へ見舞に行くことにした。		因为护理病人受了累,繁子一站起身来就会头昏眼花,只好给住院的矢须子找个看护人。每逢单日,重松才去医院探视。	A-81	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	「この薬、また飲まなきゃいけないのかしら」と矢張りがためらったので、「飲まねばいかん」と重松が云った。		“这种药还是非吃不可吗？”矢须子有些犹豫。+++“不吃可是不行。”重松说。	C	黒い雨(黒雨)
	広島地区の者は入営時に軍の連絡が十分とれていなかったもので、星もなければ何もない作業服のような服装をしたままであった。		広島地区来的入营人，因为在入营时没有很好与军部联系，所以他们就那么穿着既没有星星，也没有别的军人标志的服装，象穿工作服的人一样。	A-7	黒い雨(黒雨)
	///仕方がないので洗面所に辿りついて水道栓をひねってみた。		///没法，只有摸爬着到洗脸室去，拧开自来水龙头。	B-13	黒い雨(黒雨)
	空襲警報で兵営の倉庫から持出した毛布を野積にしてあったので、勝手にそれを一枚とってぐったり坐りこんだ。		好在空袭警报时从兵营拿出来的毯子堆放在外边，我随便拿过一条，疲惫不堪地一屁股坐了下来。	C	黒い雨(黒雨)
	私たちは上流に向って移動を開始した。道路という道路は倒壊家屋で完全に閉鎖されていたので、暫くの間は川端の踏みならし道を歩いて行った。		我们开始向上游移动，所有的道路全被倒塌的房屋封锁了，所以一时只有走河边临时踩出来的路。	A-36	黒い雨(黒雨)
	三滝も駄目だと云うので、気を取りなおして上流の川岸に上った。		看来，三滝也完了。因此，等缓过气来之后，只好朝上游的河岸走去。	A-37	黒い雨(黒雨)
	岩竹さんの顔はますます腫脹が増して、水瓜のように丸々となったので、臉が殆ど閉じたきりと同じになっていた。		岩竹先生的脸越来越肿了，变得圆圆的，象西瓜一样。眼皮子几乎跟闭着眼睛一个样。	C	黒い雨(黒雨)
	岩竹さんたち三人はマーキュロクロームを塗ってもらい、廊下の入口に隙間を見つけたので持参の毛布にくるまって夜を明かした。		岩竹先生三个人都由人给涂了红药水，在走廊的入口处找到了一点空地方，裹上带来的毯子，熬过了一个晚上。	C	黒い雨(黒雨)
	岩竹さんの顔は極度に腫れて倍くらい大きくなり、臉を指でこじ明けなければ目が見えなくなったので、担架に乗せられて東の端の重症患者の教室に運ばれた。		岩竹先生的脸极度肿胀，已经大了一倍，如果不用手指把眼皮扒开，眼睛就看不见东西。只好把他用担架抬到东头重伤员的教室里去。	B-9	黒い雨(黒雨)
	この偶然の好機を逃がしてなるものかと、両手を挙げたい気持ちであった。しかし岩竹さんは、挙げていた右手がだるくなったので左手に替えた。		决不能失去这个偶然的机会。他真想把双手举起来。可是，岩竹先生举起的右手已经发酸了，只好换着把左手举起来。	B-9	黒い雨(黒雨)
	傍でそういう声が出たので、手を下ろして目蓋をこじ明けて見ると、衛生兵伍長が岩竹さんの軍袴の紐に荷札をつけた。半ば身を起して見ると、墨汁で「庄原行」と書いてある。		旁边有人这么说。因此，岩竹先生放下手来，他扒开眼皮一看，见卫生兵小组长，在他军裤的带子上系上了行李条子。他坐起身来，见上面写着“发往庄原”。	A-37	黒い雨(黒雨)
	やがて昼食になって、団子汁のような粥のようなものが出たが、岩竹さんは食欲がないのでお茶だけ飲んだ。発熱のためだと思われた。		不一会，开午饭了，端来象团子汤一样的类似稀饭的东西。岩竹先生因食欲不振，只喝了点茶，心想借它发发热。	C	黒い雨(黒雨)
	駅の手前の坂道を行く途中、咽が乾涸びて苦しいので、道の右手の農家の土間口にいた婆さんに「すみません、水を飲まして下さい」と声をかけた。		当走到车站前的坡道上时，喉咙干得难受极了。在路的右手边，一户农家的堂屋门口有个老太太，岩竹先生要求说：“对不起，给口水喝吧！”	C	黒い雨(黒雨)
	先方は私の変りにはた姿を見て分る筈もなかったが、私が声をかけたのでやっと気がついた。		我完全变了样，对方看了，当然不知道我是谁。因为我招呼她，她才察觉出来。	A-2	黒い雨(黒雨)
	/おかげで親類縁者に早く連絡がつくことになったので、どのくらい心強く思ったか分らない。		就因为这样，我很快与亲属取得了联系。真不知对我是多么大的安慰啊！	A-87	黒い雨(黒雨)
	八月八日の晩は福山の空襲でした。その翌朝からは、福山へ通じる福塩線も井笠線もみんな不通になったので、九日の朝早く、細川の兄が湯田村から福山まで私を自転車の後に乗せて送ってくれました。		八月八日晚上，福山遭到空袭。从第二天早晨起，通向福山的福盐线和井笠线都不通车了。因此，九日一大早，细川的哥哥让我坐在自行车后边，从汤田村把我驮到了福山。	A-37	黒い雨(黒雨)
	私が添寝して、やっと眠ったので、朝四時ごろ、そっと抜けだして主人を探しに第二陸軍病院へ参りました。		我陪他躺着，才算睡着了。清晨四点左右，我偷偷地爬了起来，到第二陆军医院找丈夫去了。	C	黒い雨(黒雨)
	将校の方は帰るように頼りに云われるので、私はどこか探してみたいと思って、その近くの川に沿って川上に向けて行きました。		那个军官一个劲地劝我回去。这一来，我反而想找找看。于是，沿着附近的河向上游走去。	C	黒い雨(黒雨)
	暫く行くと倒れて呻いている人の群があったので、大きな声で『岩竹、おりませんか』と呼んでみました。		再往前走，又有躺着呻吟的人群。我试着大声呼叫“岩竹，在不在？”	C	黒い雨(黒雨)
	ところが怪我の軽い人は農家へ收容されているということを知ったので、また一わたり農家を探して歩きました。		没有人搭腔。因为听说受伤轻一些的人，收容在农民家里，于是，我又去农家找了一遍。	A-61	黒い雨(黒雨)
	怪我の軽い人だけ転送されたというので安心しました。		/因为听说只有负轻伤的人才被转送去，所以放心了。	A-2	黒い雨(黒雨)
	私は気が揉めて仕方がなかったもので、主人の先輩でこの庄原分院長をしていらっしゃる方をお願いして、院長命令で主人を二部室に移していただきました。		/我十分焦急，于是，去恳求丈夫的前辈，就是这庄原分院的院长。根据院长的命令，才把丈夫搬到一个双人房里的。	A-38	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	府中町の分院には二日二晩いるだけで湯田村の細川に行きましたが、分院で岩竹の寝ていた部屋は臭気が抜けないので、十日あまりも戸を明け放しにしていたということでした。		在府中分院只呆了两天两晚，马上就住进了汤田村的细川分院。在分院，因为岩竹所住的房间，那股臭气总不散，所以十多天一直那么敞着门。	A-7	黒い雨(黒雨)
	原爆の透過光線のために粘膜が剥離するわけです。あれは細川へ行ってからでしたので、被爆後三週間くらいたってからではないかと思えます。		/原子弹の透過光線能使粘膜剥離。那是到了细川之后出现的症状，好像是轰炸后有三个星期左右了。...	C	黒い雨(黒雨)
	孵化池の鯉の子は、二腹ぶん採取した卵のうち約八割が斃死したので、一腹二万五千粒と見て一万尾という概算である。		从两条鲤鱼肚里取出来的鱼子，其中坏死的约有八成，如果一条鱼有二万五千粒鱼子的话，那么孵化池里的鲤鱼苗就有一万条。	C	黒い雨(黒雨)
	会社の食堂がまだ開いてなかったの、炊事係に云ってフスマを混ぜた冷たい麦飯にお湯をかけて食べた。		公司食堂还没有开饭。我要炊事员在掺了麸子的凉麦饭里泡些开水，将就着吃了。	C	黒い雨(黒雨)
	パンツが濡れているので裸のまま畦道を通りぬけ、古市の禰街を横切って仮寓に帰って来た。		我的裤衩全湿了，只好光着身子穿过田间小道，从古市的■街横穿过去，回到临时住处。	B-9	黒い雨(黒雨)
	工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわしたので、僕もその通りにした。		厂长用杉木筷子在杯子里来回搅，我也如法炮制。	C	黒い雨(黒雨)
	シゲ子も矢須子も酒は飲めないの、工場長に云われて先に食事にとりかかった。		繁子和矢须子因为都不喝酒，所以厂长让他们先吃饭。	A-7	黒い雨(黒雨)
	僕はアルコール三割では濃すぎるので、水を注ぎ足す代りにちびりちびり飲むことにした。		我感到三分酒精浓了一些，虽说没有再加水，却只能一点一点地喝。	C	黒い雨(黒雨)
	実は工場長も、今日は広島市の石炭統制会社の焼跡へ行き、それから被服支廠の笹竹中尉を訪ね、何もかも埒がつかないの、通信病院の知りあいの小山医師を訪ねた。だ。		其实，厂长今天也到广岛煤炭专卖公司的废墟上去了，接着又拜访了被服分厂的■竹中尉，都没有解决问题，所以才去拜访邮政医院的熟人小山医生的。	A-83	黒い雨(黒雨)
	昨晚、工場長が帰ると僕は桌上を片づけて寝床に入ったが、家内と矢須子は裏の小川へ僕のシャツと寝間着の洗濯に行ったので、有り合せのものを着て寝たわけだ。		昨晚，厂长回去之后，我收拾完桌上的东西就上了床。妻子和矢须子到后面的小河里去洗我的衬衫和睡衣，因此，我是随便穿了件衣服上床的。	A-37	黒い雨(黒雨)
	従来、広島から通勤していたころは、月のうち二十八日までは十二時半前に出社していたが、今日に限って早朝に出て来たので、工具たちが神経をとがらせたのも無理はない。		以往，从广岛上上班的时候，在一个月当中，到二十七、八日为止，都是十二点半以前到公司里来。可是，唯独今天却早早地来了，使职工们神经紧张，倒也并不奇怪。	B-5	黒い雨(黒雨)
	横合から僕が「弁当の貝の佃煮は蛤かね」と聞くと、「潮吹貝です。潮水で煮たのを層屋が持って来たので、調理場さんのお醤油で煮詰めました。皆さんの昼食のお菜です」と云った。		我从一旁插嘴说：“饭盒里的鱼贝小菜，是文蛤吧？”“+++”是蛤蜊，黑市贩子用带有咸味的潮水煮过之后才拿来的。厨房里的人又加进酱油煮了一下，这就成了大家中午吃的菜。”她说。	C	黒い雨(黒雨)
	己斐駅に石炭貨車が入っているあてはないのだが、とにかく僕は気が急ぐので、枕木に落ちる自分の微かな影を追いながら歩いて行った。		虽说不可能指望有运煤的货车到己斐站去，但我很急，所以总是追着自己在枕木上的淡淡的影子往前走。。	A-36	黒い雨(黒雨)
	仕方がないので会社の事情を説明し、鉄道電話で石炭の今後の輸送事情を調べてもらうように、言葉をつくして駅長にも助役にも嘆願した。		没法，我只好说明公司的情况，费尽了口舌，哀求站长和助理员们，请他们用铁路上的电话，查一下往后煤炭的运输情况。	B-9	黒い雨(黒雨)
	僕の汗拭きの布は埃と汗で土色になっていた。顔を洗いたくなったので水田に沿う道に入ったが、		我擦汗的布沾满了灰和汗，变成了土色。因为想洗洗脸，就走上了通向水稻田的路。	A-4	黒い雨(黒雨)
	話はもう言論統制に逸脱するところまで行ったので、それ以上に臆測は進展しなかった。		这些话已经超出了言论管制范围，因此没有继续往下猜。	A-37	黒い雨(黒雨)
	僕は一日じゅう歩いたので疲れを覚えていた。		我跑了一天，觉得很累。	C	黒い雨(黒雨)
	隠居さんは僕が戦局に詳しく通じていると思って話をしに来たのではない。重大放送のことが気になるので、ただ話相手を誰かましかったのだ。		并不是因为我对战局非常了解，老大爷才来和我说话的，而是因为关心重要广播的事，只要是有个说话的对象就行。我说了些无关紧要的话。	A-1	黒い雨(黒雨)
	つづいて四本の歯が動きだしたので指でつまんで引張ると何の痛みもなく抜け、今では上の歯が総入れ歯である。		接着，又在四颗松动起来，于是用手指捏住，往外一拽就掉了，一点不痛。现在上牙全是假牙。	A-38	黒い雨(黒雨)
	僕と共同で鯉の養殖を始めた庄吉さんは、被爆した翌年、歯が無痛状態のまま二箇月間にすっかり抜けたので、上下総入れ歯にした。		打开始就和我一起养鲤鱼的庄吉，在轰炸后的第二年，牙齿在两个月内，就那么一点不痛地全都掉光了，上下全是假牙。	C	黒い雨(黒雨)
	///庄吉さんの上の歯齦は土手があるか無いかほど低いので、入歯の台を歯科医が技術上の極限まで高くして、唇の体裁がよくなるように作ってくれた。		///庄吉上边的牙龈因为牙床似有非有，显得很低，所以牙科医生把假牙床尽可能做得高些，使嘴唇的样子变得好看起来。	A-7	黒い雨(黒雨)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	それでも上唇が口のなかに曲りこんだように見えるので、庄吉さんは上唇を隠すため口髭をのばして今日に及んでいる。		即使这样做，看上去上嘴唇还是有点往嘴里缩。庄吉为了掩盖上嘴唇的缺陷，所以至今仍然留着胡子。	C	黒い雨(黒雨)
	///彼等が協力してくれたと書いては願書としての効力もないし、舞文曲筆の要があるので骨が折れた。		///可是，即使写上他们帮了大忙，作为申请书来说，也无济于事。因此，写这种文过饰非的材料，实在是费了老劲。	C	黒い雨(黒雨)
	弁当持参の事務員たちの沸かしている菓籠だが、みんなラジオを聞きに行っているので、ほったらかしになっている。		这是带饭盒来的工作人员，把水壶放在炉子上的。大家都去听广播去了，也就没有人去管它了。	B-1	黒い雨(黒雨)
	みんな黙っていたが、工場長が箸を持ったので僕らも箸を取った。		大家没有作声，可是，因为厂长拿起了筷子，我们也就拿起了筷子。	A-4	黒い雨(黒雨)
	菘の匂い、かすかな冷やかさを含んだ風、山の稜線、犬の鳴く声、そんなものがまず最初に浮かびあがってくる。とてもくっきりと。それらはあまりにもくっきりとしているので、手をのばせばひとつひとつ指でなぞしそうな気がするくらいだ。		草の芬芳，风的清爽，山的曲线，犬的吠声……，接踵闯入脑海，而且那般清晰，清晰得只消一伸手便可触及。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	「……いろんな思いが彼女の頭の中でぐるぐるまわっていることがわかっていて、僕も口をはさまずにそのとなりを黙って歩いた。		……我知道她头脑中思绪纷纭，理不清头绪，便缄口不语，在她身边悄然移动脚步。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	東京のことなんて何ひとつ知らなかったし、一人ぐらしをするのも初めてだったので、親が心配してその寮をみつめてきてくれた。		对东京还一无所知，独自生活也是初次。父母放心不下，在这里给我找了间宿舍。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	僕もとくにヌード写真を貼らなかったわけでもなかったのですが文句は言わなかった。		我也并非就很想贴裸体，便没表示异议。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	///「……あまりにもあっさりともんなが信じるのでそのうちに僕も本当にそうなのかもしれないと思うようになった。		///“……由于大家信得太轻率了。连我自己不久也以为可能真有其事。	A-15	ノルウェイの森(挪威的森林)
	十五分も歩くと背中に汗がにじんできたので、僕は厚い木綿のシャツを脱いでTシャツ一枚になった。		走了15分钟，背上渗出汗水。我于是脱去棉布衬衣，只穿圆领半袖衫。	A-38	ノルウェイの森(挪威的森林)
	///僕はそれについて直子に何か言おうとしたが、どう表現すればいいのかわからなかったので結局は何も言わなかった。		///我很想就这点向直子讲点什么，但不知怎样表达，结果什么也未出口。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	喉が乾いたので僕は一人でビールを飲んだ。		我口渴，一个人要来啤酒。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	僕もとくに午後の授業に興味があるわけではなかったので学校を出てぶらぶらと坂を下って港の方まで行き、ビリヤード屋に入って四ゲームほど玉を撞いた。		我对下午的课也不是很有兴致，便出了校门，晃悠悠地走下坡路，往港口那边逛去。走进桌球室，玩了四局。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	直子は突撃隊の話聞きががっていたので、僕はよくその話をした。		直子愿意听敢死队的故事，我经常讲给她听。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	彼女が笑うことは少なかったのですが、僕もよく彼の話をした。		由于她很少笑，我便经常讲起。	A-16	ノルウェイの森(挪威的森林)
	///僕も直子もゴム底の靴をはいていたので、二人の足音は殆んど聞こえなかった。		///我和直子穿的都是胶底鞋，几乎听不见两人的脚步声，	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	説明のしようもないし、する必要もないので、僕はそのまましておいた。		这既无法解释，又无须解释，我便听之任之。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	/寮の連中はいつも一人で本を読んでいるので僕が作家になりたがっているんだと思こんでいるようだったが、僕はべつに作家になんてなりたいたとは思わなかった。何にもなりたいたとは思わなかった。		///宿舍那伙人见我总是一个人看书，便认定我想当作家。其实我并不特别想当作家，什么都不想当。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	彼女も僕のことを気に入ってくれて、僕に彼女のクラブの下級生の女の子を紹介するから四人でデートしましょうよと熱心に誘ってくれたが、僕は過去の失敗をくりかえしたくなかったので、適当なことを言っいつも逃げた。		/她对我也颇关心，一再说要给我介绍她们俱乐部里一个低年级女孩，四人一同约会。但我不愿意重复过去的失败，便适当敷衍几句把话引开。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	正月のあいだ寮の食堂は開いたので僕は彼女のアパートで食事をさせてもらった。		新年的时候，宿舍食堂关了门，我便在直子公寓里搭伙。	B-2	ノルウェイの森(挪威的森林)
	僕は机の上のメモ用紙に、君が落ちたらゆっくりと話したいので、近いうちに電話をほしい、誕生日おめでとう、と書いた。		我在书桌的便笺上写道：等你冷静下来以后，想好好跟你谈谈，希望尽快打电话给我，祝生日快乐。	C	ノルウェイの森(挪威的森林)
	一週間たっても電話はかかってこなかった。直子のアパートは電話の取りつきをしづななかったから、僕は日曜日の朝に国分寺まで出かけてみた。		过了一个星期，电话也没有打来。直子住的公寓里又不给作呼电话，因此星期天一早我便来到国分寺。	A-37	ノルウェイの森(挪威的森林)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	僕は頭が痛くなってきたので食事が終ると、これからそろそろアルバイトに行かなくちゃいけないからと言った。		/問得我昏头胀脑。一放下筷子，赶紧说得去做工了。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	お医者様の話だと京都の山の中に私に向いた療養所があるらしいので、少しそこに入ってみようかと思えます。		医生说京都一座山中有一家可能对我合适的疗养院，我便打算前去试试。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	あたりはまだ明るかったので、それは何の変哲もない黒い水辺の虫にしか見えなかったが、突撃隊はそれは間違いなく螢だと主張した。		因为四周天光还亮，看上去不过是个平庸无奇的水边栖生的小虫而已。敢死队却一口咬定是萤火虫，	A-1	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	彼女の顔には見覚えがなかったので僕がそのまま食事をつづけていると、そのうちに彼女はずっと立ち上がって僕の方にやってきた。		因为对她的脸没有印象，我便只管闷头吃饭。不料过不一会儿，她竟轻盈地起身，朝我走来。	A-3	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	ただあまりにもがらりとヘア・スタイルが変わってしまったので、誰なのかわからなかったのだ。		只是发型风云突变，无法辨认了。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	///僕はこんな生き生きとした表情を目にしたのは久しぶりでだったので、しばらく感心して彼女の顔を眺めていた。		///我有好久没有目睹如此生动的表情了，不禁出神地在她脸上注视了许久。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	「邪魔も何も、もう食べ終わっちゃったよ」と僕は言った。そして彼女が自分のテーブルに戻る気配がないので食後のコーヒーを注文した。		“影响什么，都吃完了。”我说。看样子她无意返回自己的餐桌，我便讨了一份饭后的咖啡。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕は彼女が来るまでビールを飲んで待っているつもりだったのだが店が混みはじめたので仕方なく料理を注文し、一人で食べた。		我本来打算边喝啤酒边等绿子。但店内人已开始增多，只好要来饭菜，一个人吃着。	B-9	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	///僕はそれについて少し考えをめぐらせてみたが、面倒臭くなったので考えるのをやめて寮に戻り、ベッドに寝転んで永沢さんに借りていたジョセフ・コンラットの『ロード・ジム』の残りを読んだ。そして彼のところにそれを返しに行った。		///我思索片刻，终于厌倦起来，不再去想，折回宿舍。躺在床上看从记泽手里借来的康拉德的《吉姆老爷》，把剩下部分一口气看完，然后找他还书。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	永沢さんは食事に行くところだったので、僕も一緒に食堂に行って夕食を食べた。		永泽正要去看食堂吃饭，我也一起跟去吃了晚饭。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	彼女は僕の住んでいる寮の話を聞きたがったので、僕は例によって日の丸の話やら突撃隊のラジオ体操の話やらをした。		她想听我宿舍里的事，于是我照例讲了日丸旗，讲了敢死队如何做等等。	A-38	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	花屋が一軒店を開けていたので、僕はそこで水仙の花を何本か買った。		花店倒有一家开了门，我买了几枝水仙花。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	十二時にはまだ十五分ほど間があったが、水仙の花を持って商店街を歩いて時間をつぶすのもあまり気が進まなかった。僕はシャッターのわきにあるベルを押し、二、三歩うしろにさがって返事を待った。		到12点大约还有15分，我又不大愿意手拿水仙花在商店街上闲逛，便按一下门旁的电铃，退后两三步等候回音。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	二階は一階に比べると格段に明るかったので僕は少なからずホッとした。		较之一楼，二楼敞亮得多，我吁了口气。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	はじめのうち緑は僕に低音パートを教えて二人で合唱しようとしたが、僕の唄があまりにもひどいのでそれはあきらめ、あとは一人で気のすむまで唄いつづけた。		绿子教了我低音部分，准备两人合唱，可惜我的嗓门实在南腔北调，只好忍痛作罢，由她一个人尽情尽兴地引吭高歌。	B-9	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	奥のテーブルに三人組の女の子がいたので、我々はそこに入って五人で話をした。		尽头处的桌旁坐着三个女孩儿，我们加进去，五个人说说笑笑。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	「それほど面白い映画とも思えなかったけれど、他にやることもないので、そのままもう一度くりかえしてその映画を観た。		电影意思不大，但又别无他事，便坐着未动，又看了一遍。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	マービン・ゲイやらビー・ジョーズやらの音楽が大きな音でかかっていたので話の内容までは聴きとれなかったけれど、どうやら小柄な女の子が悩むか怒るかして、大柄の子がそれをまあまあとだめているような具合だった。		由于马宾基和彼吉斯等人的音乐放得声音很响，听不清两人谈话的内容。但看上去是小巧女孩儿恼怒什么，而高大女孩儿则好言抚慰。	A-15	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	あれからと三人で話をしているうちに大柄な女の子が電車に乗る時刻が近づいてきたので、僕は残った酒を西口の地下にいる浮浪者にやり、入場券を買って彼女を見送った。		三人东拉西扯的时间里，高大女孩儿乘电车的时刻临近了。我们把剩下的酒送给西口地铁站里的流浪汉，买张站台票送她上车。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	///あまりにも穏かなのでときどきここが本当のまともな世界なんじゃないかという気がするくらいです・・・」		///由于过于悠闲了，有时我甚至怀疑这不是活生生的现实世界。”	A-15	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	市内を出発して四十分ほどで眺望の開けた峠に出たが、運転手はそこでバスを停め、五、六分待ちあわせするので降りたい人は降りてかまわないと乗客に告げた。		从市区开出大约四十分钟，汽车开上一座视野开阔的山顶。司机刹住车，告诉乘客要等五六分钟，想下车的不妨下车。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	///運転手は立小便をした。ひもでしばった大きな段ボール箱を車内に持ちこんでいた五十前後のよく日焼けした男が、山に上るのかと僕に質問した。面倒臭いので、そうだと僕は返事した。		///司机站着小便。一个把大大的绳捆纸箱弄进车箱的50岁上下的晒得黝黑的男子，问我是否爬山，我懒得罗索，便回答说“是”。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕はそこで門衛の戻ってくるのを待って見たが戻ってきそうな気配がまるでないで、近くにあるベルのようなものを二、三度押ししてみた。		我在这里等了一会，等门卫返回。但看动静根本不象有人来，便按了两三下旁边门铃样的东西。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	///三階建てとは言っても地面が掘りおこされたようにくぼんでいるところに建っているので、とくに威圧的な感じは受けない。		///虽说是三层，但由于建在仿佛地面被掘开的凹陷处，并没特别给人以威压之感。	A-15	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	光の色が少し変り、風がやみ、雲のかたが変っていた。僕は汗をかいていたので、ナップザックからタオルを出して顔を拭き、シャツを新しいものに変えた。		天光的颜色有点变了，风声早已止息，云的形状也略有不同。我睡出了汗，从帆布包里掏出毛巾擦擦脸，换了件新衬衣。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	三人とも帽子をかぶっていたので、顔つきや年齢はよくわからなかったけれど声の感じからするとそれほどわかくなさそうだった。		三人都头戴帽子，不晓得什么模样和年龄。但从声音听来，都不象很年轻。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	レイコさんが突撃隊について知りがったので、僕はまた彼の話をした。もちろん彼女も大笑いをした。		玲子想知道敢死队，我便又讲了一遍。不用说，玲子也大笑起来。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	月の光がとても明るかったので僕は部屋の灯りを消し、ソファに寝転んでビル・エヴァンスのピアノを聴いた。		月光十分皎洁，我便关掉房间的灯，倒在沙发上听威尔·埃文斯的钢琴曲。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	直子は指で何度か髪をすいた。もう髪どめを外していたので、下を向くと髪が落ちて彼女の顔を隠した。		直子用手指理了几下头发。发卡已经摘掉，每一低头，发便落下遮住她的脸。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	あいつさえいれば次々にエピソードが生まれ、そしてその話さえしていればみんなが楽しい気持ちになれるのに、仕方がないの僕が寮の中でみんながどれほど不潔な生活をしているかについて延々としゃべった。		只要那家伙在，笑料就会源源不断产生出来，而只要一提那笑料，人们便顿时心花怒放。真是遗憾之至！无奈，只好不厌其烦地大讲特讲大家在宿舍里过着怎样不讲卫生的生活。	B-9	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	十一時になって直子が眠そうな目になってきたので、レイコさんがソファの背を倒してベッドにし、シーツと毛布と枕をセットしてくれた。		///11点时，直子眼睛透出困意，玲子便把沙发背放倒当床，拿来褥单，毛毯和枕头。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	///直子の肉体はあまりにも美しく完成されていたので、僕は性的な興奮すら感じなかった。		///由于直子的肉体完成得过于完美无缺了，我甚至感觉不到一丝兴奋。	A-15	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	朝食が終ると二人はこれから鳥小屋に餌をやりに行くと言ったので、僕もついていくことにした。		早餐后，两人说要去鸟舍给鸟喂食，我也打算跟去。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	「・・・何のかけりもない眩しいような笑顔だったので、僕も思わず笑わないわけにはいかなかった。	“那张笑脸没有一丝阴霾，甚至晴朗得有些耀眼，我也情不自禁地跟着笑了。・・・”		B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	風が冷たかったのでレイコさんはシャツの上に淡いブルーのカーディガンを着て両手をズボンのポケットにつっこんでいた。		风凉浸漫的，玲子在衬衫外面套了件对襟羊毛衫，双手插进裤袋。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	何とも言いようがないので僕は黙っていた。		我不好说什么，默然。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕はうまく眠れなかったのでナップザックの中から懐中電灯と『魔の山』を出してずっと読んでいた。		我上不来睡意，从帆布包里掏出电筒和《魔山》，闷头读下去。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	五時半になると緑は食事の仕度があるのでそろそろ家に帰ると言った。		5点半，绿子说得赶回家做饭，我要坐车回宿舍。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕は朝食を食べていなかったので新宿駅で乗りかえるときに駅のスタンドで薄いサンドイッチを買って食べ、新聞のインクを煮たような味のコーヒーを飲んだ。		我没吃早餐，在新宿站换车时在站台售货亭买了一个薄薄的三明治，喝了一罐咖啡，咖啡居然一股报纸油墨味儿。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	何人かの男はじろじろと彼女の太腿を眺めたのでどうも落ちつかなかったのが、彼女の方はそういうのはたいして気にならないようだった。		好几个男人目光在她大腿上溜来溜去，弄得我心神不定，但她本人却似乎不大在乎。	B-21	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	十一時半に医師の回診があったので、僕と緑は廊下に出て待っていた。		11点半，医生进来查房，我和绿子到走廊等候。”	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	病室に戻ると緑は父親に向かって自分は用があるのてちょっと外出してくる、そのあいだこの人が面倒を見るからと言った。		返回病房，绿子向父亲说自己有点事稍出去一下，这段时间里由我照料。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	緑が行ってしまったあとで僕は彼に何か話しかけてみようかとも思ったが、何をどう言えばいいのかわからなかったで、結局黙っていた。		绿子走后，我也想对他讲点什么，但不知说什么怎么说好，终归未能开口。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	緑の父親が突然目を覚まして咳をはじめたので、僕の思考はそこで中断した。		绿子父亲突然睁开眼晴，开始咳嗽，我的思路便就此中断了。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	彼は何か言おうとしているようなので、僕は耳を寄せてみた。		我见他似乎想说什么，便把耳朵凑过去。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	結局彼はキウリを一本食べてしまった。キウリを食べてしまうと水を飲みたがったので、僕はまた水さしで飲ませてやった。		终于，他吃了一整根黄瓜。吃完后想喝水，我又拿起小水壶让他喝了一点。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	水を飲んで少しすると小便をしたいと言ったので、僕はベッドの下からしびんを出し、その口をペニスの先にあててやった。		喝罢水说要小便，我从床下拿出尿壶，把口对准他的阳物。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	何のこともよくわからなかったので僕は黙っていた。		我弄不清是什么意思，无言可对。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	父親はぐっすり眠っていたし、とくにやることもなかったの、我々は自動販売機のコーヒーを買ってTV室で飲んだ。		绿子父亲睡得很熟，又没别的事可干，我们便从自动售货机里买来咖啡，拿去电视室喝着。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕は平日の講義のあいまに図書室でかなりしっかりと勉強しているの、日曜日には何もすることがないのです。		“平时我已利用课余时间，在图书馆扎扎实实地下了不少功夫，因此星期天无事可干。…”	A-37	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	公園では少年野球をやっていたので、僕は暇つぶしにそれを見ていた。		公园有少年棒球比赛，我就袖手观战，借以消磨时间。	B-1	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	そんな風に緑の父親のことを考えているとだんだんやるせない気持ちになってきたので、僕は早めに屋上の洗濯ものをとりこんで新宿に出て街を歩いて時間をつぶすことにした。		如此围绕绿子父亲思来想去的时间里，心头渐渐产生一种堵塞沉闷之感，便提早把天台晾晒的衣服收回，跑去新宿逛街来打发时间。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	料理はとでもゆっくり出てきたので、僕らはワインを飲みながらいろいろな話をした。		菜上得非常之慢，我们便边喝葡萄酒边聊天。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	どう答えていいのかわからなかったの、僕は黙っていた。		我不知如何回答，没有作声。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	そのうちに店が混みあってきたので、我々は外を少し散歩することにした。		送工夫，店里人多起来，我们便准备离开，出去稍事散步。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	—僕の手の傷が少しうずきはじめたので我々はゲームを切りあげることにした。		我手上的伤口开始隐隐作痛，我们便到此为止。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	/雰囲気はやたら屈折して暗い上に同じようなことばかりやっているの、僕は途中でいささか退屈してしまっ		电影不仅气氛离奇，光线幽暗，而且千篇一律，看到中间我就有些不耐烦起来。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕はそれほど腹が減っていなかったの、十二ピースのうち四つだけを食べ、残りを緑が全部食べた。		我并不怎么饿，十二块我只吃了四块，其余全给绿子一扫而光。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	僕は彼女の肩をそっと抱いていたが、そのうちに肩が規則的に上下しはじめ、寝息も聞こえてきたので、静かに緑のベッドを抜け出し、台所に行ってビールを一本飲んだ。		我温柔地搂住她的肩。不一会儿，她肩头开始规则地上下抖动，响起睡的声音。于是我溜下床，去厨房取了瓶啤酒喝。	A-38	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	まったく眠くはなかったの、何か本でも読もうと思ったが、		由于全无睡意，想看本什么书。	A-15	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	読みたいと思うようなものは少く、その大半は既に読んだことのあるものだった。しかしとにかく何か読むのは必要だったので、長いあいだ売れ残っていたらしく背表紙の変色したヘルマン・ハッセの『車輪の下』を選び、その分の金をレジスターのわきに置いた。		我想读的东西很少，大部分都已读过。但由于反正必须读点什么，便挑了一本书背已经变色，似乎长期滞销的赫尔曼·黑塞的《车轮下》，把书钱放在电子收款机旁边。	A-16	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	棚にはほこりがかぶったブランティーが一本あったので、それを少しコーヒーマグに注いで飲んだ。		搁物架上有一瓶落满灰尘的白兰地，我拿下来往咖啡杯里斟了一点。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	朝食を食べさせる定食屋が開いていたので、そこであたたかいごはん味噌汁と菜の漬けものと玉子焼を食べた。		一家供应早餐的定食店已经开了，我进去了份热腾腾的米饭、酱汤和咸菜煎蛋。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	「あなたが東京に帰っていなくなったの、秋が深まったのが同時だったの、体の中にぽっかり穴があいてしまったような気分になったのがあなたのいないせいなのかそれとも季節のもたらすものなのか、しばらくわかりませんでした。		秋意的加深是与你返回东京同时开始的，因此我许久都捉摸不透自己心里仿佛出现一个大洞的感觉是由于你不在造成的，还是时令的更迭所致。	A-37	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	/来年もしかしたら孫が東京に出てくるかもしれないの、そのときは出ていくというのが条件で、そのせいで相場からすれば家賃はかなり安かった。		明年他孙子可能到东京来，届时得搬出才行。自然，房租也因此比时价便宜不少。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	吉祥寺の駅から緑のアパートに電話をかけてみたが誰も出なかった。とくにやることもなかったの、僕は吉祥寺の町を歩いて、大学に通いながらやるアルバイトの口を探してみた。		我从吉祥寺站往绿子公寓打了次电话，没人接。由于没有特别要做的事，我便在吉祥寺的街头走来转去，想物色一份能够边上学边做的临时工。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	夕食のあとで緑に手紙を書こうとしたが何度書きなおしてもうまく書けなかった ので 、結局直ちに手紙を書くことにした。		晚饭後,想给 绿子 写信,但反复写了几次都没写好,最后给直子写了一封。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	住所を下に書いておきます ので 、手紙をそちらに書いてやって下さい。		地址写在下面,请往那边写信。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	緑は望遠鏡が見たい というので 、僕は硬貨を入れてやり、彼女が見ているあいだずっと傘をさしてやっていた。		绿子说要看望望远镜,我投进一枚硬币,她看的时候为她撑伞。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	昼には何を食べたのかと彼が訊いた ので 、パンとチーズとトマトとチョコレートだと僕は答えた。		他问午间吃了什么,我说吃了面包、干奶酪西红柿和巧克力。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	そのうちにごはんが炊きあがった ので 、僕は鍋に油をしいてすき焼の用意を始めた。		这时间里,饭烧好了。我 便 往锅里倒上油,升起火锅。	B-2	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	我々はどちらかというところくに話もせず、ただ黙々とすき焼をつつき、ビールを飲み、そしてごはんを食べた。かもめが匂いをかぎつけてやってきた ので 、肉をわけてやった。		相对说来,我们都未怎么开口只顾 不 声不响地吃火锅,喝啤酒,盛米饭。“海鸥”听得香味跑来,分了点肉给它。	C	ノルウェイの森 (挪威的森林)
	あまり悪びれた様子 なので 、それ以上言うのはやめにする。		瞧她一副战战兢兢的模样,他也就 不 好再说什么了。	B-1	砂の女(砂女)
	とつぜん、狂ったように、叫びだす。なんと言えはいいの か 分らない ので 、意味のある言葉にはならない。ただ、声をかぎりに、ありったけの力でわめくのだ。		突然他发狂似地大叫起来。他不知说什么好,那叫喊成不了句子。只是发出声音而已,他用足全身的力气拼命地叫喊。	C	砂の女(砂女)
	「……おそろしく毛深いたちでね、夏になっても、なかなか毛が抜けかわらない……見てるだけでも、うっとうしいと言 うので 、思いきって毛を刈ってやることにした……」	“……浑身长满浓浓的毛令人看了肉麻,到了夏天,它也 丝毫 不脱毛……看一眼都让人厌烦难受,所以,我一狠心都给它剪了……”		A-36	砂の女(砂女)
	すっぽり手拭をかぶっていたし、口から下は隠れている ので 、はっきりしないが、どうやら昨日の年寄りたちらしくもある。		毛巾围在脸上,嘴以下全部罩住了,一点看不清,可他总觉得昨天那个老头也在里面。	C	砂の女(砂女)
	時計がとまっている ので 、はっきりはしないが、穴の外では、まだ案外昼間なのかもしれない。		手表停了,不知道时间;说不定洞穴之外还是白天吧。	C	砂の女(砂女)
	女が、ランプを持って行ってしまった ので 、万事手さぐりだ。		女人把灯拿走了,他 只好 摸索着到处找东西。	B-9	砂の女(砂女)
	失踪者がしばしば、謎の霧の向うに消えたまま、消息を絶つてしま う といっても、それは多く、本人の意志によるものだろう。それに、犯罪のにおいがしないかぎり、刑事あつかいではなく、民事のあつかいになる ので 、警察も、必要以上の深入りは出来ないらしいのだ。		失踪者往往消失在迷雾的那一头,即使消息断绝,也大多是出于本人的意志。而且,只要没有犯罪的气味,也就不会当成刑事事件来处理,只能当成民事纠纷处理;所以,警察也不能深入去调查。	A-36	砂の女(砂女)
	暗がりの中の、手さぐりの仕事 だったので 、念入りに、残った部分で、さらにもう一とまきしめつけておく。		///一切都是在暗中摸索着干的,所以,以防万一,他用剩下的绳子又捆了一道。	A-36	砂の女(砂女)
	返事かわりに、女はじっと目を閉じた。いましめを解いてもらえない ので 、すねているのだろうか? 馬鹿な女だ。		女人紧闭双眼代替回答。到现在还没给她解开,她闹别扭了吧。傻瓜女人。	C	砂の女(砂女)
	半分、腐りかけた、細い角材 なので 、気がおれた。		细细的木材已经有一半腐烂了,着实令他担心了一阵。	C	砂の女(砂女)
	///なるべく、砂をかぶらずにすませようと、ロープだけをたよりにする ので 、体がくるくるまわって落着かない。		///他尽可能不让沙子塌方。身子完全靠绳索吊住,所以,咕啾咕啾转个不停,安定不下来。	A-36	砂の女(砂女)
	振り返ると、いつか追手は、右後方、七、八十メートルのところまで、遠のいている。なんだって、あんなに、コースを外れてしまったの だろう ? おそらく、斜面をさげようとしすぎて、かえって、あんな不手際を して かしてしまったのだ。けっこう向うも疲れてきたらしい……追手の方が、疲れやすいとは、よく言うが……すばやく、靴をぬいで、はだしになる……ポケットをふくらませては、邪魔になる ので 、ズボンのバンドにはさみ込むことにした。		回过头来一看,追兵拉在七、八十公尺远的地方。怎么回事,走错路线了吗?恐怕太想避开斜坡了,反而干出那样的蠢事来。对方也象十分疲劳……常言道:追兵易衰……他赶快脱了鞋,光着脚丫……口袋胀鼓鼓的,变得好累赘,他把口袋掖进腰里。	C	砂の女(砂女)
	その声はたかかった ので 、ひくい天井にはねかえって、襟もとまですっぽり絹蒲団をかぶって朽木のようにねていた南嶽の耳を打った。		和尚大声问道。因为噪音太高,震动了低矮的天花板,而且这声音终于传进了如同枯木一般躺着的南岳耳朵里,那棉被一直盖到了脖子。南岳紧闭的眼皮微微张开一条缝。	A-1	雁の寺(雁寺)
	刺っている ので 、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子である。額が前へとび出ている。ひどい奥眼 なので 顔がせまく見える。		这孩子 因为 头剃得精光,头盖骨显得特别大,惹人注目,额头向前突出,眼眶很深,因此脸庞显得狭窄。	A-1	雁の寺(雁寺)
	刺っている ので 、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子である。額が前へとび出ている。ひどい奥眼 なので 顔がせまく見える。		这孩子 因为 头剃得精光,头盖骨显得特别大,惹人注目,额头向前突出,眼眶很深,因此脸庞显得狭窄。	A-37	雁の寺(雁寺)

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	何かいったようなので、弟子たちはのぞきこんで耳をかたむけたが、「さ」ときこえたようであった。		他好象有什么话儿要说。弟子们的眼睛都注视着他的嘴，侧着耳贴近，隐约听见他在叫唤“里子”的声音。	C	雁の寺（雁寺）
	酒気をおびていたので南嶽は、里子の首すじに手をやりながら微笑していった。		满口酒气的南岳，一边伸手抚摸里子的脖颈儿，一边微笑着说。	C	雁の寺（雁寺）
	木の先はまるでぶち切ったように丸く折れているので、とまった鶺鴒は白い空を背景にして剥製の置物のようにみえた。		树顶上如同被一刀砍掉似的平平齐齐截断。停立在那上面的鶺鴒，以白色天空作背景，看上去象是一个鹞鹰标本放在那儿。	C	雁の寺（雁寺）
	雨露の滴が埃のたまった敷居や縁の板をよごしているの、里子はぶう一つと息をふきかけてからそこに坐った。		雨露的水滴把积满灰尘的门槛和廊子地板弄得污脏。里子只好吹去灰尘，坐在廊子边上。	B-9	雁の寺（雁寺）
	慈念はじいっと里子の顔を見つめていたが、急に里子が沈んだ表情になったので、早口にいった。		慈念全神贯注地凝视里子的脸，看到里子表情突然深沉起来，急忙说：	C	雁の寺（雁寺）
	里子は茶室の縁から立つとき、鼻緒のゆるい庭下駄が石にはさまれたので、ちょっと半身をかたむけた。		里子从茶室的廊子边站起来的时候，因为木屐带松了，木屐被夹在石头缝里，因此，上半身向前倾倒。	A-85	雁の寺（雁寺）
	隠寮と本堂とは廊下づたいに行けたけれども、書院をへだてていたので距離はあった。		从僧房到大殿要经过一条走廊，又隔着书院，因此，有一段距离。	A-37	雁の寺（雁寺）
	///引磐は紐でむすんだ金の棒で、力強く響をたたくので、本堂の響子よりは強くひびいてくる。		///引磐用绳子系着的金槌子使劲地敲打，因此，比大殿里挂磬的声音还响。	A-37	雁の寺（雁寺）
	///ここには木魚はないが、尊駄天はちょうど慈念の背の高さまでの段の上に壁をくりぬいて廟がつくられてあるので、慈念は立ったまま説経しているのである。		///这里没有木鱼，书院正好放在同慈念身长一般高的地方，在墙壁上挖一个象庙似的洞里。慈念站立不动念经。	C	雁の寺（雁寺）
	/押しかぶさってくる慈海のうしろに、何やら黒い影が走ったのをみたので里子ははッとした。		///正在这时，里子看到慈海后面出现一个黑影，吃了一惊。	C	雁の寺（雁寺）
	「教練があるのでいやなんです。・・・」		“因为为军训课，我讨厌。・・・”	A-1	雁の寺（雁寺）
	内陣の仏壇のある部分ほうろに突き出ているので、その下は倉庫になっている。		正殿的佛龛部分向后面突出，那下面就充作仓库。	C	雁の寺（雁寺）
	/水音がしているの、少しの足音くらいは消されてしまふらしい。		他也许只顾听水声，对里子那轻微的脚步声根本听不到。	C	雁の寺（雁寺）
	何のことやわからぬといった顔をしているので、里子は慈海の言葉をひきとって説明した。		默然似乎还听不明白慈海说的话，里子接过话来作了说明。	C	雁の寺（雁寺）
	病み上りなので、南窓にも秀子にも和尚の顔は、一年前よりかけてみえ、髭はそっていたけれど、病人相はかくせなかった。		因为病刚好，南窗也好，秀子也好，都看出慈海的脸色比一年前憔悴多了，尽管剃了胡须，但仍掩饰不了病容。	A-1	雁の寺（雁寺）
	衣笠山から千本まで、三十分ぐらいで歩くので大人よりも早い。		从衣笠山到千本，才走了三十多分钟，比大人还快。	C	雁の寺（雁寺）
	慈念は、観音経の段になると、ふところから写本を出して拝みながらよむので、ずいぶん時間がかかった。		慈念进入观音经时，从行囊里掏出抄写的经文，捧着念，相当费时间。	C	雁の寺（雁寺）
	焼芋屋の車のうらから、によつきり頭の大きい小僧が出てきたのでびっくりした様子である。		看到从烤红薯车后面突然冒出来一个大脑袋瓜的小和尚，显出很吃惊的样子。	C	雁の寺（雁寺）
	十一月八日は、孤峯庵には内外からの出来事が生じた。それは慈海が帰ってこないの、里子が極度の頭痛をおこし、目角をつりあげ、慈念にあたり散らしたことである。		十一月六日，孤峰寺里外发生了种种事情。因为慈海没有回来，里子感到极度的头疼，吊起眼角，对慈念滥发脾气。	A-1	雁の寺（雁寺）
	里子は部屋の炬燵蒲団に頭を付けてうとうとしていたが、うしろの廊下で足音がするので、背中をのぼしてふりむいた。		里子头上蒙着棉被，迷迷糊糊，听到后面廊子脚步声，赶快伸直身子，回头看。	C	雁の寺（雁寺）
	作造も、伝三郎もひる間働いているので、眠りたいのが顔に出ている。		作造、传三郎也因为忙了一白天，脸色困倦。	A-1	雁の寺（雁寺）
	平吉が承諾したので、猪之吉と伝三郎が穴掘りに出かけていった。		平吉答应了。于是，猪之吉和传三郎立即出门去掘墓坑。	A-38	雁の寺（雁寺）
	源光寺は、周囲をちょっと見まわしたが、慈念の足音がそこいらにしないので、よっこらしよ、と声をたてて立ち上ると、廊下に出た。		源光寺的和尚用眼睛扫视了一下周围的人们，注意附近听不到慈念的脚步声，就站起身来大声说：“我去叫他来一下”，走出廊子。	B-1	雁の寺（雁寺）
	雪州はそう思ったが、会議の中へ慈念を入れて聞いてみないことには結論が出そうもないので、もう一と声、大きく叫んだ。		雪州心想，但又想到各位长老、和尚们正在会上等候，不叫他去问个明白，就不了了结，因此又一次大声地喊：	A-37	雁の寺（雁寺）
	「七日のひるすぎまで、和尚さんはいつものとおどした。久間はんの店が先代の命日でお経をあげてくれ、いう使いがみえたので、慈念はんにくよくよいやほりました。」		“直到七日中午过后，慈海还跟往常一个样。他当时说话普普通通，并没有让人感到有什么异常。	C	雁の寺（雁寺）

原文		訳文		分類一覧	作品名
会話文	地の文	会話文	地の文		
	四人の住職たちは、それぞれの侍者を先に寺へ帰して、久間家からのひき出物は持たずに、手ぶらで七時すぎに孤峯庵を出た。		四个老和尚，各自都让侍者先回寺去了，因此，久间家供奉的东西都无法带走，双手空空地在七点过后离开了孤峰庵。	A-37	雁の寺（雁寺）
	二、三日前から慈念はそんなことを里子に聞いていたが、まさかと思っていた里子は翌朝、起きてみて、慈念の姿が庫裡にないのに驚いた。		两、三天前，慈念对里子这样说过，但里子想，这怎么可能呢？第二天起床一看，慈念不在僧房，使她大吃一惊。	B-5	雁の寺（雁寺）
	/寝つくまでのあいだ、彼女はからだをちぢめて、また頭の中で計算をしてみるのだった。しかし毎月物価が上がって行くので、計算のしようがない。		在入睡前，她还要蜷缩着身子，盘算明天的生活。可是物价每月都在上涨，盘算也没有用。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	電灯がほの暗いので、榮子の化粧の白さが淨きあがって見えた。		电灯晦暗，只见荣子涂满脂粉的白脸出现在登美子的眼前。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	となりの座席にいた青年が立ちあがったので、登美子は眼をさました。		坐在这边的青年站了起来。登美子醒了。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	類型だけをあこがれていた。あるいは実体を知らないのに類型を通して実体を空想していた。……		这个概念使他憧憬不已，正因为不知道那种事的实际内容，因此他只能通过概念去想入非非。	A-47	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	その人はなつかげに埋まっていたので、発見した人たちがまわりの雪を掻きのけたらしかった。		那个人埋在雪里，发现他的人正在用手拨开周围的积雪。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	自分の方では脱出できないので、江藤賢一郎の力を借りて脱出を試みたものようであった。		光依靠她自己的力量显然不够，于是借助于江藤贤一郎的力量。	A-38	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	ストライキの第一日目。江藤賢一郎は授業がないので、自宅から一歩も出なかった。		罢课的第一天，江藤贤一郎正好没有课，没出家门一步。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	それが罠であることを知っているのに、江藤はさらに警戒し、用心ぶかくなっていた。		贤一郎知道这是个陷阱，更加提高了警惕。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
父は忙しいので週末だけしか来られません。		父亲很忙，只能到周末才能来。		B-22	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
女ばかりで少々心細いので、賢一郎さんが遊びに来てくれればいいのに、母が申します。		母亲说：我们这里尽是些女人叫人心心里不安，要是贤一郎来了就好了。		C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
わりあい部屋数もあるので、何日でもお宿は致します。		这里有的是空房间，你可以来往几天；		C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
鶯が鳴いているし、ホトトギスも鳴きます。でもおいしい物があまりないので、遊ぶところが少ないので、私も姉もいささか退屈しています。		黄莺和杜鹃都在啼叫。可是这儿没有好吃的东西，也没有什么好玩的地方。我和姊姊都觉得有点无聊。		C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
///幸い市民体育館が近いので、週に一二度はプールへ泳ぎに行きます。		///幸好附近有市民体育馆，我一星期里有一两次到那儿去游泳。		C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
大学の仲間が葉山に合宿しているので、そのうち海へ行くつもりです。		最近我将和同学们一起到叶山去。还要到海边去。		C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	照明が暗いので、水の底に沈んでいるような気持だった。		灯光很暗，两人好象沉在水底里一样。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	ところが江藤はそろそろ登美子と縁を切らねばならないと考えていたので、その頃は二人の交渉を絶っていたのだ。		可是那时候江藤已经考虑要同登美子断绝关系，两人几乎没有来往。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	必要な話は登美子がするだろうと思っていた。しかし呼ばれたのを断わるわけにも行かないので、その部屋へは行って行った。		要说的话就叫登美子说，但既然来叫了也不好拒绝，就跟着进了那房间。	A-22	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	筋道を立てて相手を納得させることはできないので、上手にごまかすより仕方なかった。		这不能用道理来说服她，只有巧妙地欺骗她。	B-13	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	///すると涙が流れてきた。しかし冷たいタオルのようなものが額と眼の上へのせられていたので、彼の涙は母にも解らなかつた。伯母がふり向いて何か言った。母がそれに答えて、		///想到这里，他流下了眼泪。但他的额角和眼皮上压着冷毛巾，母亲没有发觉他的眼泪。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	内容は、いろいろ事情がありますので、どうか今後は賢一郎とおつきあいはやめて頂きたい、申訳ないけれども私からお願ひする……という意味の文面であった。		内容大意是：由于种种情况，今后请不要再同贤一郎来往，实在很对不起，这是我的请求……	A-15	青春の蹉跎（青春的蹉跎）
	格子戸のあたりで音がしたので、彼は幻想の世界から眼さめた。		铁门响了，他从幻想世界中惊醒过来。	C	青春の蹉跎（青春的蹉跎）

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。然し創痕は死ぬまで消えぬ。		①幸好，刀子小，拇指的骨头硬，所以直到今天指头还连在手掌上，不过那伤痕到死也不会消失。②幸亏小刀很小，加上大拇指的骨头又硬，所以，大拇指至今还留在俺的手上。可是伤疤却到死也不掉啦。③幸好刀小，大拇指骨头硬，所以至今大拇指还连在手上，可是伤疤却是到死也不会消去了。	A-36	A-36	A-36	坊ちゃん（哥儿）
	日が強いので水がやに光る。		①太阳很毒，水面光闪闪的看上去令人目眩。②阳光很强，水面亮得很。③阳光很强，水面特别耀眼。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	やな女が声を揃えて御上がりなさいと云うので、上がるのがいやになった。		①讨厌的女人齐声招呼我进去，我哪里愿意进。②一群讨厌的女人齐声地说“请进”，俺可就不愿意进去了。③几个讨厌的女人齐声说：“请进啊！”被她们一说，我反而不高兴进去了。	C	B-1	C	坊ちゃん（哥儿）
	門から玄関までは御影石で敷きつめである。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通った時は、無暗に仰山な音がするのて少し弱った。		①从大门到校舍入口一律铺着花岗岩。昨天，车子在这石头上走起来嘎啦嘎啦直响，真有些受不了。②从大门到屋门，满铺着花岗岩的碎石子。记得昨天俺坐的人力车，从这条石子路咯咯啦啦的拉过去的时候，发出很大的声响，令人很不舒服。③从学校大门到校舍门口的路，是用花岗岩铺的。昨天车子从这铺石路上走过时，发出叽叽嘎嘎的响声，使人很不舒服。	C	B-7	B-5	坊ちゃん（哥儿）
	十五人目に体操の教師へと廻って来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれったくなった。		①轮到第十五名，该给体操教员行礼时，因为同样的动作要重复好几遍，我有些不耐烦了。②当俺转到第十五位那个体操教员跟前的时候，同一个动作俺已经多次重复了，真叫人腻烦！③第十五人是个体育教员，转到他面前时，因为老一套的动作反复了多少回，我有些厌烦了。	A-1	C	A-1	坊ちゃん（哥儿）
	部屋が暗いので、一寸気がつかなくなったが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。		①屋里很暗，一时没有留意，等一照面，才发现都是本校的学生。因为他们先打了招呼，我也寒暄了几句。②屋子很暗，俺最初没注意到他们，这样一打照面，原来都是学校里的学生。对方向俺行了礼，俺也回了礼。③屋里很暗，我没有注意，等一照面，原来全是学校的学生。他们向我行礼，我也还了礼。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	その晩は久しぶりで蕎麦を食ったので、旨かったから天麩麩を四杯平げた。		①很久没有吃到这样可口的面食了，当晚我一连吃了四碗炸虾面。②这天晚上，吃上了好久未吃上的荞麦面，又好吃，所以足足报销了四大碗“对虾面”。③当晚，因为好久才吃到荞麦面，觉得味道极美，一下子吃了四大碗炸虾面。	C	C	A-1	坊ちゃん（哥儿）
	/この手拭が湯に染った上へ、赤い綿が流れ出したので一寸見ると紅色に見える。		①这条毛巾经温泉水一泡，原来的红条子突现出来，看上去有些发红。②这条毛巾不但被温泉浸得变了色，而且还挂上了红道道。乍一看，颜色鲜红。③这条毛巾经温泉水一泡变了颜色，再加上原来的红色条纹，乍一看，象是红颜色的。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえっ糞しまったと飛び上がった。		①忽听一阵吵闹声，睁眼一看，哦，糟糕！连忙跳起来。②俺似乎感到一阵吵嚷，突然惊醒了一看，哼，好极了！俺一下子跳了起来。③忽听一阵喧闹之声，我睁开眼一看，哎呀，糟糕！随即跳了起来。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	かかる弊風を杜絶する為にこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃がす位なら始めから教師ならん方がいいと思います。		①我们来校供职正是为了杜绝这样的恶习，要是对此放任不管，那又何必来做教师？②我想，正是为了杜绝这种恶劣的风气，我们才执教于本校，如果对此置若罔闻，那还不如压根儿不当教师的好。③正是为了杜绝这种弊端，我们才到学校里来供职的。如任其自流，那不如打开始就别当教师。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	謝罪をしなければその時辞職して帰るところだったがなまじい、おれの云う通になったのでとうとう大変な事になってしまった。		①因为我坚持学生不赔罪就辞职，所以只好勉强照我的意见办理，结果闹出更大的事情来。②假如不道歉，本来俺早就该辞职回家了。糟糕的是，由于按俺的要求办了，终于出现了更大的乱子。③因为我坚持如不赔礼，当即辞职不干，所以才勉强照我说的处理的。不想却因此酿成了大祸。	A-65	A-88	A-37	坊ちゃん（哥儿）
	早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなったので待ち遠しく思っている、又一入あわてて場内へ馳け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。		①我盼望火车快点来，没有人说话，实在难受。这时，又有一个人风风火火地跑进车站，这是红衬衫。②俺心里盼着，车快点来就好了，说话的伴儿不在了，等车等得俺直起急。这时，又有一个人慌慌张张地跑进车站里来。俺一看，是“红衬衫”。③因为没有说话的对象了，便等得不耐烦，只盼着火车快点来。这时，又有一个人匆匆忙忙地跑进站来。一看，是红衬衫。	C	C	A-3	坊ちゃん（哥儿）

原文		訳文		分類一覧			作品名
会話文	地の文	会話文	地の文				
	何を云っても、えとかいえとかきりで、しかもそのえといえが大分倒らしいので、仕舞にはとうとう切り上げて、こっちから御免蒙った。		①不管我说什么，他总是一个劲儿“喂”或“不”地应和。而且就这么两个字，似乎很不情愿。最后，我只好就此收场，不再奉陪了。②不管俺说什么，他总是只说声“是”或说声“不是”，而且他的这声“是”或“不是”，也是十分勉强挤出来的，因此，最后只好不再领教，结束了俺俩的谈话。③任我说什么，他总是嗯、不地敷衍着，而且说的时候也显得很勉强似的。到后来，我只好主动收场，不再说话了。	B-9	A-37	B-9	坊ちゃん（哥儿）
	途中で親切な女みた様な男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃ余っ程厭になっている。		①有时又反过来想想，觉得他是个象女人一般亲热的男子，可那实在不是什么好心肠。越想越觉得他是个讨厌的家伙。②他是个象娘儿们一样亲切待人的人，其实他压根儿就不是什么亲切。现在俺一明白了这点，就更加厌恶他了③后来，也曾一度改变过看法，觉得他是一个象女人般亲切的男人。可实际上他并不是个亲切的人，所以反过来更讨厌他了。	C	B-1	A-36	坊ちゃん（哥儿）
	僕はあの人物を知らなかったので君に大変失敬した勘弁し給えと長々しい謝罪をした。		①我不了解他的为人，实在对不起你，请你原谅。”他说了老长一段谢罪的话。②由于我不了解他的为人，对你很无礼，请你原谅。”——他这样说了很长很长道歉的话。③我不知道他是这么个人，所以对你多有得罪，请你原谅。”他说了一大套谢罪的话。	C	A-15	A-36	坊ちゃん（哥儿）
	赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をばちばちと拍った。		①红衬衫刚刚坐下，豪猪就霍然站了起来。我很高兴，不由地吧嗒吧嗒拍了几下手。②在“红衬衫”刚一坐下，“豪猪”就迫不及待地站了起来，俺高兴极了，不由得鼓起掌来。③野猪不等红衬衫坐下，蓦地站了起来。我高兴极了，不由得嘟嘟地直拍巴掌。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	芸者はあまり乱暴な声なので、あつげに取られて返事もしない。		①艺妓们被这粗暴的喊声吓了一跳，没有回答。②那个艺妓吓了一跳，没敢答腔。③艺妓被这过于粗暴的喊声弄得目瞪口呆，没有搭腔。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）
	あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支ない。		①不妨可以这样认为，悔过是假的悔过，宽恕也是假的宽恕。②你只要这般想：道歉也是表面道歉，原谅也是表面原谅，就行了。③既然认错是假认错，那宽容也来个假宽容，只有这么对待，才不会上当吃亏。	C	C	A-89	坊ちゃん（哥儿）
	巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕まったのは、おれと山嵐だけである。		①来了十五、六个警察，学生们顺着相反的方向退去了，只捉住了我和豪猪两个人。②警察来了十五、六名。由于学生们都朝相反的方向跑掉了，因此，被抓住的，只是俺和“豪猪”两个人。③警察来了十五、六个，由于学生朝另一个方向跑了，抓到的只有我和野猪两个人。	C	A-20	A-15	坊ちゃん（哥儿）
	僕の弟が堀田君を誘に行ったから、こんな事が起つたので、僕は実に申し訳がない。		①我的弟弟邀请堀田君去，出了这样的事，我实在抱歉。②是我的弟弟邀堀田君一起去的。所以才发生了这件事，我觉得很对不起。③是我的弟弟去邀请的堀田君，发生了这件事，我实在抱歉。	C	C	C	坊ちゃん（哥儿）